特254
349

普選議會の重なる人々

1

0005057000

0005057-000

特２５４－３４９

普選議会の重なる人々

角屋謹一・著

文王社

野党の巻

昭和３

ABC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２
けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

特254
349

帝國圖書館藏

普選議會の重なる人々

―政界人物評傳（野黨の巻）

帝國圖書館藏

自序

○

涙香、黑岩周六氏がまだ萬朝報の社長として健在であつたその全盛時、山縣五十雄、斯波貞吉、阿部充家三先生の盡力で入社して以來、帝國議會を始め各政黨本部に出入すること十年あまり。その歲月は極めて迅速に流れた。

○

その間、寺內、原、高橋、加藤(友)、山本、淸浦、加藤、若槻、田中と、擧げ來れば九代の內閣が更り、そして僕の屬して居た萬朝報も、黑岩先生沒後は、入りかわり立ち代り五、六の經營者が据はり込んで、その更るごとに當年の同志は四散して行つた。昔思へば全く夢のような話である。

○

筆を染めて人物傳をものしたことも最早や久しい話であるが、玆に我國最初の普通選擧に當り普選大衆より選ばれて光榮ある議席を贏ち得たその人々を見ると多士濟々で誠に偉觀を呈し

て居る。こゝに特別議會を控へ先づ、攻擊軍たる民政黨より四十九名を拉し來りて評釋を試みるのも、これ等の人々はその政治的手腕識見に於て政界の雄、然らざれば政治家として將來大を爲し得ると共に、まさしく一黨を代表する人々である事を確信するが爲めである。

○

萬朝時代、刺戟と感興の湧くに委かせて隨分書きなぐつたものだ、近くそれ等を一纒めにして出版したいと思つて居る。

昭和三年の春

世田ヶ谷の莊にて

角屋謹一

目次

立憲民政黨宣言……一
同　政綱……三
氣を負ふて起つ……濱口總裁……四
……床次の德望と若槪の智慮……
遠謀深慮……安達謙藏……六
將相の器……小橋一太……八
雄辯宏辭……野田文一郎……一〇
力量と手腕……中島彌團次……一三
寡默實行……澤本與一……一四
名物男……山崎傳之助……一六
雲蒸龍變……加藤鯛一……一九
無言の雄辯……原脩次郎……二〇
圓滿妥協……平川松太郎……二二
圓轉活達……大麻唯男……二三
才幹と力量……岸衛……二四
薩南の雄……津崎尙武……二六
錦上花の……永井柳太郎……二七
植民問題の……牧山耕藏……二八
花も實もある……川崎克……二九
健實な地步……横山金太郎……三〇
北門の重鎭……山本厚三……三三
男をあげた……森峰一……三四
名を刻せむ……小泉又次郎……三六
掘出しもの……杉浦武雄……三八
機を見る敏……小股政一……三九
剛腹剛直の……武富濟……四〇

寛厚にして……俵　孫一……四三
對支外交……赤塚正助……四四
手腕の人……賴母木桂吉……四六
俊敏と精進力……中野正剛……四八
背後の力……富田幸次郎……五〇
滿身の赤誠……横山勝太郎……五三
その凄涼味……櫻井兵五郎……五四
清節うまず……田中善立……五六
至人の憾に……中村啓次郎……五八
奇智氣轉……田中万逸……六〇
創業の才……本多貞次郎……六三
黨務妻帑を……粟山博……六四
縱横の劃策……櫻内幸雄……六六
幅廣の底力……三木武吉……六八
みごと進出……八木逸郎……七〇
協調の立役者……武内作平……七三
節義に堅い……松田源治……七四
帷幄の人……榊田清兵衛……七六
天性の世話好き……寺島權藏……七八
小氣味好き……岩切重雄……七九
勳功校輝……降旗元太郎……八〇

民政黨を繞る

……貴族院の重なる人々

學識と手腕……江木翼……八三
老幹の梅……石塚英藏……八五
親分肌の……岡喜七郎……八六
重厚の人……太田政弘……八七
義俠の人……川崎卓吉……八八
細心で太ッ腹……松村義一……八九

立憲民政黨

宣言

世界ノ進運ハ年々速度ヲ加ヘ、環境ノ變化ハ斷エス幾多ノ新問題ヲ提供スル。我國ハ憲政ヲ布キテ四十年、過去ヲ顧ミ、現狀ニ卽シ、今ヤ普通選擧ノ實施ト共ニ、國民的一大飛躍ヲナシテ、外ハ世界ノ進運ニ寄與シ、內ハ國勢ノ變局ニ善處セネハナラヌ。併シ內外重要ノ時期ニ際會シ、之ニ相應スル大飛躍ヲナスニハ、一定ノ順序ヲ追ヒ進ムアリテ退クナク、一歩ハ一歩ヨリ其ノ力ヲ增サネハナラヌ。吾人カ立憲民政黨ヲ創立スルハ、正ニ政治ヲ基礎トシテ秩序アル局面展開ヲ實現センカ爲テアル。

立憲民政黨ハ國體ノ精華ニ鑑ミ、一君萬民ノ大義ヲ體シ、國民ノ總意ニヨリテ、責任政治ノ徹底ヲ期スルモノテアル。抑々複雜ナル現代ノ社會組織ニハ、正義ニ基ク政治的統制カ必要テアル其ノ强キ政治上ノ力ハ、國民ノ總意ヲ象徵シ、國民ニ對シ責任ヲ負フモノテナクテハナラヌ。乃チ吾人ハ普通選擧ニヨリ、全國民ノ要求ヲ帝國議會ニ集中シ、天皇統治ノ下、議會中心政治ヲ徹底セシメンコトヲ要望スル。

立憲民政黨ハ、外交ニ於テ國際正義ヲ高調スル。國際正義ハ、通商、經濟、土地、資源ニ關スル國際的原則ノ上ニ之ヲ具體化シ、以テ世界平和ノ基礎トセネハナラヌ。我カ國民ハ其ノ存立ヲ確保シテ、世界ノ進運ニ寄與スヘキ貴キ使命ヲ自覺スル。吾人ハ現代人類ノ間ニ磅礴タル正義ノ精神ヲ把握シ、國ヲ擧ケテ道ヲ行フノ決意ヲ固メネハナラヌ。

立憲民政黨ハ、經濟、金融、產業、資源ヲ國家ノ意志ニヨリテ整調シ、自由競爭ノ能率ヲ善用シテ、社會公衆ノ福利ニ合致セシメンコトヲ要求スル。整調セスシテ干涉シ、自立セスシテ依賴スルハ、政治經濟上ノ通弊テアル。生產ハ之ヲ合理化シテ其ノ能率ヲ高メ、分配ハ之ヲ社會正義ニ則リテ、都市農村ニ亘ル國民生活ノ不安ヲ去リ、社會共存ノ原則ヲ樹立シテ階級鬪爭ノ禍根ヲ除クハ、政治ノ重キ使命テアル。

立憲民政黨ハ、時代ノ趨勢ヲ察シテ教育ヲ刷新シ日新ノ社會ニ處シ、品性アリ實力アル國民ヲ養成センコトヲ要求スル。夙ニ眞理ヲ熱愛スルノ精神ヲ鼓舞シ、一面固陋ナル思想ノ拘束ヲ除キ他面輕薄ナル妄斷ノ習癖ヲ去ルハ、所謂思想善導ノ眼目テアル。就學上ノ機會ヲ均等ニスルハ、國民教育ノ要諦テアル。模倣詰込ノ弊ヲ排シ、獨創自發ノ力ヲ養フハ、闊達有爲ノ個性ヲ長スル所以テアル。立憲民政黨ハ、斯クノ如クシテ教育制度ヲ改善スルト共ニ、社會ヲ學園トナシ、經

驗ヲ師友トナサシメンカ爲メ、社會ト學校トノ聯絡ヲ緊密ナラシメンコトヲ主張スル。

立憲民政黨ハ、內部ノ組織ニ於テ、役員公選ノ原則ヲ確立シ、役員ハ黨員ノ信賴ヲ受ケ、責任ヲ明白ニシテ黨務ヲ執行スル。斯クテ立憲民政黨ハ、政界積年ノ弊竇ヲ打破シ、黨員ノ總意ニヨリ公明ノ發動ニ出ツヘキ體系ヲ完備スル。

吾人ハ、叙上ノ大綱ヲ掲ケテ、江湖ニ訴ヘ、新興勢力ヲ糾合シテ、日新ノ經綸ヲ行ハンコトヲ提唱スル。今ヤ普選ノ實施ヲ前ニシテ、政局轉換ノ基準ハ確定セラレタ。立憲民政黨ハ、野ニ在リテ權威ヲ發揮スルト共ニ、朝ニ立チテ國務ヲ擔任スルノ重大責務ヲ有スル。乃チ廣ク天下ニ宣シテ、吾人ト志ヲ同シウシ憂ヲ共ニスル公衆ノ協力ヲ切望スル。

政綱

一、國民ノ總意ヲ帝國議會ニ反映シ　天皇統治ノ下議會中心政治ヲ徹底セシムヘシ

一、國家ノ整調ニ由リテ生產ヲ旺盛ニシ分配ヲ公正ニシ社會不安ノ禍根ヲ芟除スヘシ

一、國際正義ヲ國交ノ上ニ貫徹シ人種平等資源公開ノ原則ヲ擴充スヘシ

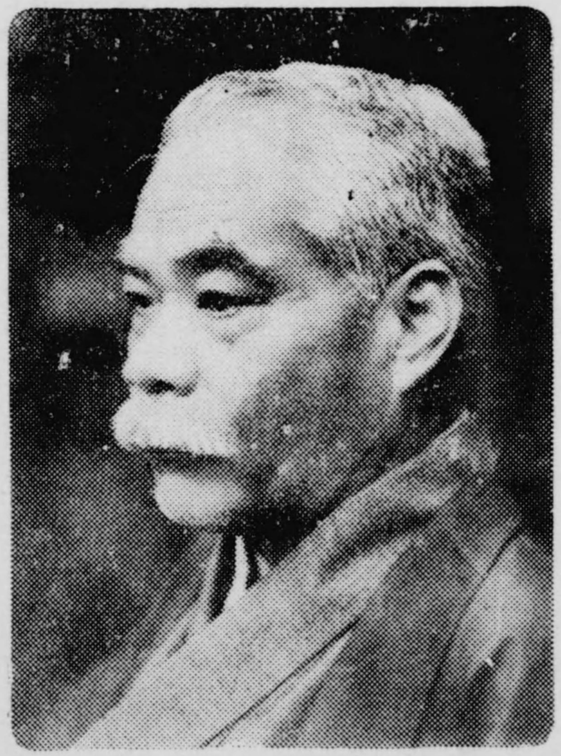
一、品性ヲ陶冶シ獨創自發ノ個性ヲ啓キ學習ノ機會ヲ均等ニシ進ンテ教育ノ實際化ヲ期スヘシ

一、立法行政及地方自治ニ浸潤セル時代錯誤ノ陋習ヲ打破シ以テ新興ノ氣運ニ順應スヘキ改造ノ實現ヲ期スヘシ

氣を負ふ濱口總裁

威望一世に敷く

昭和日本の一大躍進を意味する普選の結果は政、民兩黨の勢力相伯仲し、これが爲め議會に於けるキャスチング、ヴオートは微々たる中立議員等に依つて握られんとする、



されど二大政黨對立の時代來りて政界のこと、頓に光明を增すものあり。一方の將帥、濱口の光るあるありて、天下の政治特に自ら安きの概あらしむ。沈毅彼れの如く、智慮周密、博學多識にして正義を踏んで敢て恐るゝところなし。まさしくこれ、當代における一大偉觀である彼れを繞りて輝く諸星、また才鋒を隱して肅かに彼の信賴に任じ、智謀を深く秘て、人の和成れり、天下

新時代の要求は民衆の無產政黨の群立するまた會、劣勢を以て天下のながら政權の移動、また必ずしも保し難からざるべきは當然の數である。

濱口の周圍を見ること以であるが、顧問若槻禮後を擁せることは、獅子て、今後政局の展開、け

若槻顧問

床次顧問

若槻の智慮と床次の德る同黨の議席まさに二百十七、貴族院に於て彼れを支持するものその大半を制するから、彼れがやがてその政綱に表明せる國民の總意を帝國議會に反映し、天皇統治の下議會中心政治を徹底せんとの主張は、遠からずして實現せらるべきを信ずるのである。

めて彼の爲めに支柱たるを欣ぶに於ての事、又何か成らざらんやである。思念、政治の表に現はるゝにあり、偶然でないが、現實はまた既成政友政權を把る時代でもある。たゞ然しは、やがて今日の政治を觀察する所次郎、床次竹二郎のありて彼れの背斷崖に倚りて猛威を揮ふものであつだし刮目に價するものがある。望とは今暫く云はず、衆議院におけ

遠謀深慮の一參

謀總長

安達謙藏氏

國憲黨の守護神、佐々友房にその後ありと謳はれて、却つて出藍の譽を荷ふものは彼れ安達だ。十年の苦節酬いられて、憲政會に一陽來復すれば、彼れも遲れ馳せながら遞相の椅子を占めたが、嘗ては大養が掛け、また野田大塊が掛けたところのそれで、政黨人の隨一を迎へるに慣れた遞信省は、彼れに於て益々その感を深からしむるものがあるのである。

聰明を語る廣い額と、鞏固なる意志を裏書する鼻と口と、そして冷徹そのものゝやうな靜かなる眼、これぞ實に苦闘また力戰を重ねて倦むことなく、當年にあつては加藤總裁を補佐し、政權をめがけて離れゆく人心を繫れざるに繫ぎ、改選毎に揮ふ敏腕は直に選擧の神をもつて呼ぶに十分であり、改選たま〳〵閥族、特權階級の手に落ちたる際、これが奪回に身命を擲つて直ちに憲政の神として欽慕せらるゝに少しも缺けたるところはなかつた彼れの面目である。

沈毅果敢、策謀當代に並ぶものなき彼れは、まさしく今日政界の第一人者であるが、彼れの特質は或は表面の事よりも裏面の籌策にあり、大浦子の大同倶樂部當時より、その懷刀となつた閲歴あり、加藤伯また彼れを唯一の智囊としたのであるから、今日濱口總裁が彼れを後楯として有することは、千軍の兵を有するよりも力强いものがあるのである。

今日九州の地、南は悉く床次の聲望により民政黨に彩られ、中部或は政民相半するの情況ではあるが、往年の政敵小橋一太、その强大なる實勢力を提げて、共に政見を同じうして一黨に籠ることゝなれば、肩を叩いて語る莫逆の友である。勢威やがて四方に伸びるであらうことは云ふまでもないが、彼等の目をつけるところは素より九州の一地方のみではない。相並ぶ總務として責務は愈々重いと同時に、めぐり來る政權は彼等を重要な地位に就かしめるであらうことは自明の理であり、また萬人齊しく注目するところでもある。

一私人として安達は多趣味多方面で、醫術を語ることは最も得意としてゐる。談たま〳〵軍事と政治とに及べば、淳々として盡くるところを知らず、昔は朝鮮に渡つて朝鮮時報社や、漢城新報社を創立したほどの、創業の才と文筆とを有しても居たのである。

高橋内閣瓦解に際し『政友會月夜に釜を拔かるゝか』と、わき上る感興を胸に秘めて、眉一つ動かさなかつた彼れ安達は、次回の選擧と政權と、それ等に向つて水も洩らさぬ深慮を凝らしつゝあるのだ。

將相の器　八

白髮に包む

小橋一太氏

熊本縣は政爭激烈を極める點に於て、全國に冠たるの地位にある。彼れは甲を擁して一歩も讓らじと頑張れば此れ乙を奉じてその牙城に迫り、堂々相爭ふて死なほ斷せざるの慨があるのは、勇ましさの限りではある。されば憲政會に安達を有し、政友黨に小橋を有してゐた時代には、いづれか早く大臣の位置を贏ち得ると、その最員々々に從つて一方の成功を祈つたのであるが、先輩としての安達は先、選擧民の期待に副ふことが出來たのである。

小橋は素より政黨人として育つたのではない。東大を出ると直ぐ山口縣を振り出しに、地方官として各地をめぐり內務本省に歸つて參事官から衛生局長、地方局長と土木局長とを經て同次官にまで經上つた官人である。水野內相下の次官としての彼の手腕は、內務畑に飛ぶ鳥も落とす勢力を見せてゐたのであるから、今日と雖もその方面に對する睨みは常人に勝つて利くのである。

同鄕の關係から清浦內閣成るに及び、內閣書記官長となつて、與黨の增大に努力はして見たが時非にして遂に敗れ、半歲にして榮職を去つたがその後政局は幾變轉、一度民政黨成立する段取となるやこの運動に最も力を入れたのは、何人も知る通り憲政會にあつては安達で、本黨にあつては彼れ小橋であつたのだ。犬猿も啻ならなかつた兩雄は、今や薄紙一つ隔てぬ所に相對座し、胸襟を披いて共に喰ひ、共に旅して地方地盤の增大と、黨の內容を充實せしむる爲めに畢生の努力を傾けて居る。智謀の深大を象徵するかのやうな白髮の頭、滿身の覇氣をこゝに集むるかと見える紅顏こそ、彼の前途と共に民政黨の隆昌に識するもので、彼れのあるところ和風漲り、永い間の官僚生活をさらりと捨てゝ、五十年の野人をこゝに見るかの感あらしむる所以のもの、彼れの勤むるところまた尋常一樣ではないからである。

本黨の幹事長としての彼れは、當時憲政會の橫山幹事長の熱誠にして民衆的なると、政友會の鳩山の鷹揚にして包括的なるに比して頭腦の明晰と手腕の俊敏なるを讃へられもしてゐた。今や彼れ總務の列に入りて黨務に盡瘁するところ多大である。しかも今や龍虎相爭ひし往年の安達對小橋の如き關係にあらず、足並を揃へる唇齒輔車の間柄となつたわけであるから、次の機會に於ては一擧にして、熊本縣は蟬く二箇の榮冠の爲めに、祝杯を擧ぐるの時が來るであらうと思はれるその時こそ彼れもまた、幸運者の列に入るのである。

雄辯宏辭

―純眞の政治家―

野田文一郎氏

剛堂加藤伯が健在の頃、特にその將來に嘱目した男に野田文一郎が居る。

惜しや前回の選擧に敗れた結果、當然歸するところの政務官の椅子をフイとしたが、その間英氣を養ひつゝあつた彼は、今回の選擧に猛然として起ち遂に兵庫縣第一區に於て最高點を贏ち得て、天晴れ普選議會の花型としてその活躍を一般から期待されて居る。

剛堂伯はよく純眞の政治家を愛した、時流に迎合する政治家は斷じて排斥するところであつた。權勢に阿附せず、正を踏むで怖れるところなき政治家は常に剛堂伯の歡迎するところであつた。即ち彼もその一人に選ばれたのである。圓滿にして圭角のとれた人格、それであつて烈々たる氣魄を藏し所信を斷行することに於て人後に落ちないものである。殊に新時代にも十分なる理解を有し、青年の共鳴點を多量に保有しても居る。

普選の美花は一朝にして咲いたのではない、普選同志が制限選擧を葬り政治的生活に劃時代的新局面を展開さす迄には實に二十年の長きに及んで獲得運動は燃えさかつたものであつた。

殊に原内閣の時代、普選を稱して『危險思想なり』と叫ばれた事もあつた、その間にあつて終始一貫普選の必然性を唱へ普選の避くべからざるを高調した加藤高明總裁は、遂に街頭に出で普選を主張する時代でもあつた、當時普選大衆は歸せずして憲政會の普選斷行に集まつたのは當然の事である。

アル夜の青年會館に催した普選演說會は加藤總裁の出席をまつて割るゝばかりの盛況を呈した、その夜特に加藤總裁は約二時間に亘る普選演說を試みたのであつたが特に若手よりは彼が選ばれ壇に起ち普選演說に虹のような氣を吐き大向を唸らした事もある、その雄辯、宏辭、肺腑を貫くの辯は一種の風格をも添へて聽衆悉く魅了されずには居られないのである、廻り來る民政黨内閣には必ずや彼も政務官一方の椅子を占める事と思はれるがいづれにしても彼の將來は光輝に滿ちて居る、

彼は明治四十三年大阪控訴院判事を辭して辯護士を業として居るその品位ある辯論と頭腦の明晰は他の追從を許さないものがある。

腕手と量力

申分のない

一二

中島彌團次氏

中島彌團次と言へば、濱口總裁の秘藏ッ兒で、先の內務大臣秘書官として肩で風切つた即ち彼れ彌團次の事である。

性は恬淡、決して名利に拘泥せず、その洒々落々の裡にも常に絕大なる實行力を藏し殊に剛健質朴の精神、よく濱口の謹嚴莊重に調和して毫末もその亂れたるを聽かぬ。

かの愛黨の精神に燃えた中原德太郎博士の後繼者として、その地盤により東京第二區から駒を陣頭に進め、今や飛ぶ鳥を落さんばかりの內閣書記官長たる鳩山一郎を始め民衆黨首領たる安部磯雄等をはるかに凌ぐ最高點で、実事鹿を中原に射止めた彼の政戰結果は、確に万丈の氣を吐くに足る事は勿論であるが、しかし、その背後に潛む濱口の德望、及び中原博士生前努力の賜である事は言ふ迄もない事だ。

學生時代には濱口家の食客として苦鬪の執權をつとめて、四十五年帝大法科を卒業すると直に濱口の長官たりし專賣局に入り、役人生活の第一歩を踏み出したが然し役人生活の單調は決して彼の滿足するところではなかつたのだ。そして肺腑を貫く底の彼の雄辯は、彼をかつていよいよ政界躍進を促す事の切なるものがあつたのである。

しかし苦節十年の憲政會の酬ゐられし日、彼も濱口藏相の秘書官として、又は內務大臣の秘書官として初めて彼の志しの第一歩を踏み出したのであつたが從つて、彼の活躍は決して他に見るが如き、凡々たる一箇の秘書官ではなかつた、囊中に處するキリはその時既に鋭端を示して居たのである。

その透徹の頭腦はヨク濱口のせい名を伸張する事を忘れず一方黨本部との連絡を密にして長を以て短を償ひ天晴れ名秘書官としての評判を贏ち得た。將に彼個人としての活躍時代は、市會總改選の時で、その明暗飛躍は頗る大局を有利に導き從つて彼の政治的素地は十分に造られもしたのである。

普選議會の花型として、又民政黨にはなくてならぬ闘士としての彼の存在、更に進むで彼の政治的前途の輝々たるものあるはけだし當然であるかも知れない。

新進氣鋭

その堅實味

澤本與一氏

始め松村義一先輩等の胸中、自ら成算ありしとは言へ、當時黨内では相當の悲觀説を爲すものが尠からずあつたようである。

しかしその政戰結果は、皮肉にも美ん事、豫想を一蹴して、しかも最高點の優位を以て當選の光榮を獲た事は、その背後に江木、松村先輩の努力の偉大なりしものありしとは言へ、天下に万丈の氣を吐いたものと言ふべきである。

江木氏の寵兒で、秘書官時代は光つて居たゞけ各方面に好評を得て居た。そして大臣の前に於てもその所信を述べて毫もひるむところはなかつた。

彼はモト久原房之助の經營になる久原鑛業會社の秘書役として才腕と機智を認められ、憲政會政友會總裁田中義一大將のお膝下、しかも政友絶對優勢の地から、前司法大臣の秘書官たりし澤本與一を、民政黨公認として出馬さした事は、タトエ、御大江木翼を

内閣成ると共に、江木司法大臣に見込まれてその秘書官となつたのである。そして若槻内閣辭職後は、又前の古巣に立ち返り久原房之助の信頼を得てその參事となり機の到るを待つて居たが、議會が解散となると直に江木、松村氏等の推擧にて山口縣第二區から打つて出で中原に鹿を追ふたのである。

その時、社長の久原も、田中首相の依囑により重大なる政治的使命を帶びて海外に特派され歸朝するや彼れ又政治的一大躍進を決心して天晴政友會公認として名乘りを揚たものである。

社長たりし久原房之助對澤本與一、それは議席では一線を劃した敵味方でも、院外一歩を出れば肩を敲いて語るの間柄である。タトエ、久原の祿は食むだ事があつても、それは平素彼の主張する主義政見とは別個の問題である。此の點は何等主義も節操もない輕輩とは自ら異るものがあるのだ。彼は新聞記者出身である、手腕もあれば押しもある、抱擁力もある。そして常に新智識の吸引につとめ新時代に對する理解を忘らぬ、中島彌團次と合はせて秘書官出身の双美たるを失はないだらう。

普選議會の名物男たる

山崎傳之助氏

原内閣に依つて普選の尙早が叫ばれて居る時、彼は和歌山の青年を引具して中央に展開する普選運動の渦中に飛び込み悪戰苦闘を續け、又は地方新聞記者團を代表して（彼は和歌山日々新聞社長）言論の統一に盡力したなど彼の功績はけだし普選史を飾るべきものが尠くないのである、從つて彼は、一和歌山よりは全國普選大衆の間に著名である。

政友會全盛に對する憲政會の苦節十年時代、和歌山に於ける憲政會は、殆ど彼一人の努力によつて支持され今日の隆盛を見るに到つたのであるがしかも今回の普選に依つて政友會の重鎭岡崎邦輔のよる海草郡も彼等の爲めに覆返された感がある、

一體で、海草閥とは彼が始めて名づけた言はゞ彼はその名付け親で、人もなげな政友會の態度に憤慨して與へた海草閥なるものも普選の大波を喰つては大たまりもなく一蹴されて了つたのだ。

彼は有田郡氣賀の一寒村に產れその十八代目を繼ぐで居る、大正四年始めて縣會議員に選ばれて以來唯一の憲政系一粒種。そして立候補する事數度、之が爲め家財を蕩盡したがソンが祟く今日報ゐられたのだから彼の得意以て知るべしである。

然し彼の光榮の背後にみね子夫人のある事を忘れてはならぬ。今度こそはとばかりにみね子夫人は寢食を忘れ夫君を勵まし奮鬪努力した、將に選擧四五日前、實父を失つた夫人は、秘してその訃を傳へず、ます〳〵夫君を勵まして特に平素と異るなし、その態度の健氣さ、以て男子も及ばざるものがあつたのである。安達選擧長が口をきわめて賞めたのも決して故なしとせぬ。

普選案上程の日、傍聽席に頑張つてその形勢を監視して居た彼が議場に展開する政友會の横暴に憤慨激怒の餘り傍聽席から議席に飛び降り所謂る議場侵入を敢行せんとした事も今は昔の夢に過ぎない、現實は普選代議士として堂々として壇上に政治を論ず選良である。

性、頗る磊落不羈、飲めば即ち一升の酒、醉へば豪快の氣を吐いて倦むところを知らず、そして押しもあれば腹もある、利慾に恬淡にして貧乏に甘んじて居る、けだし民政黨に名物男を一枚加へたと共に普選新議會に於ける彼の活躍は刮目の價値に富む。

雲蒸龍變

輝々たる將來

加藤鯛一氏

たのだ。ソレは決して誤らなかつた。彼は新進中、出色の名譽を負ふて攻防第一陣に起つてその牙城を護り、又は遊説副部長として。第一線に於て東奔西走席暖まるを知らず、よく彼の雄辯は新進民政黨の主義政策を全國に宣傳して既成政黨から甦生したる新政黨の爲に万丈の光彩を放ち、又一方には少壯代議士四十餘名より成る『更新會』の世話人として四方に活躍して、年輩政治家の頭に生新の氣を注入し以て渾身の力を民政黨の爲めに捧げても居るのだ。

憲政會内閣の頃彼の後援會が愛知犬山ならぬ、東京澁谷で組織された事は彼の人氣の一端が窺はれもする。當時、加藤剛堂伯は非常に彼を愛して居たものである。

某夜。澁谷公會堂には若槻内閣を始め濱口藏相、安達遞相、片岡商相、町田農相のお歴々が交々起つて彼の爲めに一辭を呈する事を忘れなかつた。

若槻内相は……『加藤君の爲めに後援會の組織を見た事は美しい事である、これこそ人情の極致であるだけ加藤君にも今後責任の重且つ大なるものがある。ソレを果す爲めには政治的に成長することである。諸君も加藤君がやがて内閣を組織する事が出來る迄加藤君を後援せられたい。

濱口藏相『加藤君は思想問題及び、社會問題に對して理解ある事は聽いて知つて居たが、去日の稅制整理委員會に於て反對黨の古武者にして財政通たる三土忠造君をとらへ財經問題に對し一々數字をあげて一騎打の勝負をやつて居たのを見ては財經問題にも造詣ある事を知つて驚いた事である――』

安達遞相『ソモ〳〵後援會なるものは大隈老侯によつて始めてつくられたものである。ソレを果す爲めには政治的に成長す若槻後援會とか、床次後援會とかが出來たようであるが、實を言へばこれ等の人々は後援會などなくとも好い人々である。然し茲に澁谷の人々に於て前途有爲の加藤君の爲めに、又は赤貧洗ふが如き加藤君の爲め後援會をおつくり下さつた事に對し私は非常なる敬意を表すると共にアル意味に於て政界革新の第一歩とも見る事が出來る。

それより町田。片岡兩相は『加藤君が稀に見る雄辯家であるとか、利權に淡々にして未だその けがされたるを聽かぬ……』等

述べ當夜の加藤後援會は盛況裡に幕を閉ぢたことこそ政界稀に見る事とされて居たのだ。

無產政黨に於ける一方の雄加藤勘十は實に彼の令弟である、賢兄と賢弟、ソレは主義政見こそ異なれその兄弟仲の好い事も、揃つて孝道をつくす事に於ては何等異なる事ないのである、彼は當選二回にして少壯有爲を謳はれそして來る濱口内閣に於ける政務官の有力候補の一人に數へられても居る。

無言の雄辯

協調の才

原脩次郎氏

清浦特權内閣瓦解してより、加藤並に若槻の兩氏相讓り相受けて首班たりし憲政會内閣には、官人として、また黨人として、また黨人として彼れ原を要求する大なるものがあつた。總務安達、入りて遞相たりし後に於ける彼れの地位は。筆頭總務として政憲兩派の協調を一手に引き受け、水も洩らさぬ交渉ぶりに、彼是、枕を高うして彼の手腕を信ずることが出來たほどに、彼は圓滿にして德望高き一黨の支柱であつたのである

だから若槻内閣成りて後ちやがて粕谷議長の勇退することあり、其後を承くべき議長候補者としては、筆頭總務の彼れ原こそ、適任なりとして推されもしたのである。然しながら福德圓滿なる彼は、決して進むで華やかな役なぞにあり附から考へは持たぬ。況んや留守師團長としての彼の責務は、愈々重かるべきを思ふて、森田總務を若槻首相に薦め又は人に說いて、遂に森田にその花を持たせたなどの悠揚迫らざる彼の度量は、彼の選擧區が有する茫洋、霞ケ浦のそれにも似て一寸そこゐらの人には眞似の出來ないことである。從つて普選内閣成るの日、當時憲派内閣の留守師團長としての彼は、重要の位置に對し先手特權？を有する譯でもある。

彼は、臺灣の一官吏を振り出して、一轉して經濟社會に進出した實業家出身である、そして既に政治家としてはモウ十分なのにかはてて加へて六尺豐かの堂々たる體軀、その上威嚴と柔和とを兼ね備へた彼は、どこへ出しても大政黨の領袖として敗をとるような事は斷じてないのである。從つて現在彼が有する勢望よりする時は茨城縣より大臣を出す日の又遠きにあらざる事を思はしめても居る。

黨總務としての彼れは、前述の如く聲望彼れに及ぶものとてはない。そして色んな役員の選定をしなければならないやうな場合には、彼れは黨本位から割り出してその選任をなすのであるが彼れの政事に明るき、人事に精通せる、よく安達を補けてその誤算なからんことに努めこれを果すに十分なるのである。

しかも、彼れの德望は、一味の不平組さへも緘默せしむると云ふ。彼れが協調の才もまた偉大なるかなである。

圓滿妥協の才

平川松太郎氏

今は外務次官の森恪君と、一度は戰つて敗れもしたが、二度目には見事雪辱して、さすがの森君をして地盤探しに流浪させねば已まなかつたのである。

彼れが地方に於ける人氣は非常なもので、職業上の辯護士としても、彼れの盡力に俟つものは却々多い。一度彼の手中に握られたる事件は、圓滿解決を目標に、甲乙ともにその裁きを喜ぶ底のもので、目に角だてた爭ひも、彼の妥協の才の前には、また我を折らねばならなかつたのである。

それ丈け彼れは注意周到で、今度の財界の危機に際しても、平川君は早くこれを見越し、且つはその努力を傾けて金融界の爲めに策するところがあつたので、彼の小田原實業銀行の如き、よく不祥事も惹起しないで濟んだのである。これ實に彼れの手腕の致すところで、平常の彼れの働きもあり、彼れを德とし、彼の爲めに奉公を惜しまぬものは決して尠くはないのである。

まして政黨界の事、野田大塊の如き妥協々調の才は常に必要である。民政黨が彼れのかうした方面に注目してゐるのも、決して無理ではないだけに最高幹部の信頼も厚い。

圓轉滑達、活力縱横

大麻唯男氏

圓轉滑達な氣宇を表示する彼の頭と、横溢する精力を物語る彼の顏貌とは、當選一回にして早くも政黨界に深く印象づけらるゝに至つたが、それも淸浦內閣の秘書官、白頭小橋の懷刀としての彼れの働きがもの凄かつたからだ。親任待遇としての小橋翰長のもとに、少壯有爲、敏捷果敢な彼れの如き人物は是非とも必要であつたのだ。

帝大法科を出るとすぐ地方官となつて、山梨、山形、神奈川と渡り歩いた彼は、警保局の外事課長として羽振りを利かす間もなく同鄕の先輩淸浦子に見込まれて、その時から發心して官界を見捨て、始めて政界踏進となつたのである。爾來政局幾變轉、小橋の民政黨入りと同時に彼もこれに跟隨し今回の普選には天晴れ當選二回を數へる事となつたが春秋に富む、彼の活動力と精力を以てすれば、民政黨にはなくてはならぬ人物で、從つて今後の榮達もまた計り難いものがあるのだ。

才幹力量

磨かれるダイヤ

岸　衛氏

伊豆駿河――靜岡縣第二區から最高點を以て當選した新人の一人に岸衛が居る、在學中ホテル經營を以て國家に貢獻するの決心を堅め三十五年東京外國語學校卒業と共に直ちに歐米各國に於けるホテル經營の視察研究に赴き、英國のホテルセシルを振り出しに獨逸のパラストホテル、佛國巴里のマヂエスチツクホテルを最後に大正五年歸朝するや、直ちに帝國ホテルの副支配人として令名を走せ大正二年再び、米國に赴き紐育第一流のアスターホテルの名譽副支配人としていよ〳〵その才幹力量を認められ今ぢや、日本觀光株式會社を創立して清くそして明るい感じのする熱海ホテルを經營し、今日の盛況を以て彼が多年の抱負の一端を實現しつゝある傍ら、彼が平素提唱するところの風景の資本家たる觀光政策に一歩を進めつゝあるのである。

卽ち國富策としては輸入超過の現狀を打破するには外人を誘致して、多額の金を日本の地に得さしめ。もつて國際貸借の改善に努め。またこれと共に、和親、親睦を進むるの機關ともなし且つ東西文明の融和混合に資せなくてはならぬ。從つて觀光事業としては先づ伊豆を中心としたる周圍の地方と伊豆一國を連鎖して國立公園たらしめる外はない、此の地方が今尙、『磨かれざるダイヤモンド』として放置されて居る事は觀光政策を阻止するものであつて國民外交の拙劣を如實に語るものである、で、自分は此の磨かれざる『ダイヤモンド』たる駿河、伊豆の一帶をして光輝燦然たらしめる重大なる責任があるのだ……。

と先づその一端として彼が熱海町長を經て縣會副議長時代三十万圓を投じて十國峠のラセン狀道路を開鑿して遊覽自動車の登山に便し又五十万圓の豫算を以て海岸遊覽道路の新設を提案して之が通過を見今や實現途上にある。

斯くて彼の手によつて始めて此の『磨かれざるダイヤモンド』は漸く磨かれつゝあるのだ。彼の理想とする燦然たる光輝を放つの日の決して遠からざる事を思はしめても居るのだ。本年四十四、若きに似合はぬ彼の事業家としての手腕、又、政治家としての手腕は端睨を許さぬものがある。中央政界に乘り出した彼の將來も、彼の所謂る磨かれざる『ダイヤモンド』が光輝を放つに從ひ一段と光彩を放つであらうことが一般に想像されもして居るのである。黨中切つての外國通殊に財經問題については理解とその研究とを怠らぬ。

椿と花の

薩南の雄

津崎尙武氏

當選する事今度で三回、政治家としては眞紅の血をもる椿の花咲く大隅が、その根據地で、床次の聲望により彩られた鹿兒島の天地は、殊に彼にとつては格段の金城湯地でもある。頗るの磊落で、そして豪放、鹿兒島人特有の性格は決して彼に於て蝕れては居ない。堂々たる體軀、以て壇上の雄を語り、度胸もあれば手腕もあり、智慮もある。東大政治學科卒業後高等文官試驗に及第し警視理事官を經て海外協會中央會副會長、紐育土地建物會社取締役としての今日を有して居るが、彼がまだ理事官時代、官吏の變り種としてその長官を手古摺らしたものだ。

その頃から政治家肌で闘士滿々、遂に床次御大に認められ政界進出の志望を遂げる事が出來得て以て節義に堅い彼れとして昔も今も床次に盡くす事に於て何等毫末も變る事のなき所以でもあらうが、何れにしても新時代の理解を忘らぬ彼れが政治家としての將來は、輝々として居るのである。彼は殖民政策を最も得意となし絶大なる雄圖を藏し邦人の海外發展に對し今日迄大努力を傾注して居る。

牛島小泉幹事長の後繼者として津崎尙武が居る。常任幹事の筆頭、即ち副幹事長の重位に在つて、よく幹事長を補け自ら誤らざらん事を期して居る。

床次王國を以て鳴る鹿兒島第三區から乘出し代議士に

錦上華の大雄辯

永井柳太郎氏

『天に輝く一點の星、地に咲く一輪の花にも、それに負はされた使命がある』と、彼の普選演說を知らないものはないまでに、彼の絶世の大雄辯は、天下に響く知れ渡つてゐる。

流石剛勇の中橋も、二度目の彼との接戰には、尻尾を卷いて遁走し、更に京大の暉道文藝博士も、また彼れの軍門に降らねばならなかつた所以のもの、彼の雄辯と彼れの政界に於ける氣品堂々たる態度とが、民衆を魅了したが爲めに外ならぬ。

新時代の政治家としての彼は、固よりマキヤベリズムの如きを以てして、よく善良なる政治を興すことの出來ない理由を知りぬいてゐる。彼の行藏またその思想の反映たるは云ふまでもないが、彼はまさしく野人にしてその風格は大名の如く、鷄群中の一鶴なりとの感は彼に於て愈適切なるを覺ゆるのである。

植民問題の第一人者

牧山耕藏氏

早大を出ると、直ぐに朝鮮に押し渡つて、新聞記者を振出しに、幾多の事業を經營する傍ら目下朝鮮二大新聞の一たる朝鮮新聞社の社長である。從つて彼の言説は鮮滿言論界に重きをなし、朝鮮總督も彼の意見は餘程尊重して居るのを見ても彼の聲望を窺知する事が出來る。

今日の同志、中野正剛や山道襄一が、同じく朝鮮にあつて記者界に名を連ねてゐた時分には、その出世も彼や先、これや先と思はれたものであるだけ本黨に居る時は院内總務として專ら憲本聯盟の帷幄に參じ、民政黨の基礎を造つたその功決して尠しとせぬ。

卽ち今や彼れは當選四回、その身上は歷として總務の重きに任ずべく十分であるから、政機一たび熟した場合には、植民問題の第一人者たる彼は、確かに重要の椅子を獲るであらう。

性格果敏、頗る抱擁力に富むだ一方の闘將で、さすが蒙古の襲來に困苦を嘗め盡した壹岐に生れた者としての風格を備へてゐる。青年の指導に盡す彼れの熱心と、中央政界に重きをなす彼れの將來とは、彼れをして愈々多幸に導くであらうことが信ぜられてゐる。

花も實もある

川崎克氏

前の陸軍省參與官川崎君の政治的生命は、山道襄一、鈴木富士彌君等と共に、今後民政黨に於ける中堅の尖端に、暫く萬丈の光彩を引き、やがて大幹部の列に自ら進み入るであらうことは確實である。

その中で、川崎は特に花も實もある氣品高尙な才人であるが、伊賀燒の研究にかけては古今獨歩の含蓄さへもあるのは、籠に梅を挾んだ梶原景季の故事にもなぞらうべきもので、ともすれば枯渇木石に等しい政客の間に於ける攝り出しものである。

彼れの演説は却々抑揚頓挫に富んだもので、一度尾崎咢堂を學んでその形容おのづから相似るあり、たまたま三重に地盤を拓いて、その信望を得て以來、第二世尾崎に似來るところまた偶然でないものがあるが、顏貌までが似てゐるとは、不思議なめぐり合はせでもある。彼は民政黨中財政通を以て聞え、濱口總裁も彼の財政論にはいたく感服しても居る、のみならず大正十年の議會に於て氣を吐いた地租委讓反對演説は偶然にも今期議會に於て三土藏相を矢面に起たせ肉薄する彼の武者振りは、定めし大向を唸らすに足る事と思はれる。

健實な地歩

不拔の力

横山金太郎氏

前藏相早速整爾なきあとの廣島縣にあつて、民政黨の爲めに氣を吐くものは彼れ横山金太郎だ。當選六回、同鄕の荒川五郎君にはその回數に於て劣つてゐるが、彼れは總ての儕輩を凌駕して、今や居然として中國に雄を稱へてゐる。荒川が當選七回にして早く遞信副參政官にまでなつた身でありながら、護憲內閣の當時政務調査會長として、不遇の身を喞つてゐたのに比べると、彼れ横山は第五十二議會最後に大飛躍を試みて院內總務から、黨總務に移るといふ政治的優秀な地歩を占めて來たのである。

廣島縣には政友會にあつて現に遞相たる望月圭介君がゐるが。少壯前途を囑望されるものに民政黨の山道襄一がある。これは原內閣當時その雄辯が屢々奇功を奏することがあつた爲めに、異常な出世を見せたわけであるが、彼れ横山はみし〳〵と、踏み固めて來た丈けに一番健實味があるといはねばならぬ。その地方に於ける横山の努力を以てしても、市會議員から同議長となり、縣會議員から同副議長となつて、この間刑事事件の辯護士としては、殆んど他の端睨を許さぬものさへもあるのである。即ち廣島縣辯護士會長として、斯界に重きをなした所以であるが、彼れの摯々として口頭を逆る法理論は、千萬無量の法理をこめて、訴人も爲めに泣き、裁判官も心大いに動かされることが多いとの評判である。東、東京に横山勝太郎あり、西廣島に横山金太郎ありて存することは、法曹界の力であると同時に、民衆の立場、爲めに安しの感さへなきにしもあらざるを覺ゆるのであるが、やうやくにし白くなりかけた兩横山の髯の色が、如何にその慈愛に富んだ眼と共に、衆人に親しまれてゐるかを知るものは、血筋をわけた二人とは云へ、あまりに共通點の多い性格に、世人は興味の一瞥を與へずしては已まないのである。彼れは先輩早速に負ふところの渾大なるを感謝してゐる。そしていつかはその英資をついで、その恩に酬いることのあるべきを期してゐるが、情誼切なる彼れの資性よりする時は、まことにさもあるべきことで、彼れの今日の政治的奮鬪努力を以てすれば、それは必ずしも至難であるべきではない。況んや中國を代表する第一人者としての彼れが、今後の榮達は期して待つべきであつて、彼れが地方の選擧民は普選內閣成るの日に彼れの爲め、地方の爲めに祝杯を擧げることが出來るのである。

明敏の頭

北門の重鎮

三二

山本厚三氏

北海道小樽市、その隅々にまで、彼の名は隠れもない、それだけ小樽は由來憲政會――民政黨優勢の地で彼の努力に依つてその優勢が支持されても來た。彼の金城湯池で彼の前には如何なる強敵も歯がたゝない。

全道第一の繁華地小樽實業界の牛耳をとる商業會議所會頭を振り出しに隆々たる勢力を伸べ聲望を重ね、一方全道二大新聞の一たる小樽新聞の主腦として政治的進出の素地をつくり、遂に中央政界に乗り出し當選四回を重ねた今日、黨内外に重きを爲す院内總務としての重要なる椅子を占めもして居る、

一體で、政黨の要するところは智力であり、金力であり、またこれを按配考覈して實行に移すにあり、黨中その材幹に於て決して尠しとせぬか彼れの如きは此の方面を代表するに足る人物たるを失わぬ。

即ち識見に加ふる周密なる思慮あり策あり、性寛厚にして人に對し血もあれば涙もある、特に財政經濟に通じ殖民政策は彼の得意とするところだ。そして普選獲得には大に民衆の味方となり二惡戰苦闘、よく今日の普選實施を見たる彼の功績は見逃してはならぬ、

要するに北門の要港に隆々たる存在を確保する彼は、今や押しも押されもせぬ民政黨の支柱である、從つて彼が此の時潮に乗る今後の政界雄飛はけだし刮目に値すべきであらう。

二大政黨對立し政黨内閣確立の今日濱口内閣成るの日も決して遠からざるべし、その榮光の輝かん時、彼も又た重要の椅子を與へられる事に於て決して異論の餘地はない事と思ふはれもして居る。

彼は一ツ橋高商出の秀才で商議會頭を經て目下北日本汽船會社長海運倉庫組合長にして代議士となる事四回の本年四十八歳。その政治的前途輝々として居る。

大敵と組み—男をあげた

三四

森峰一氏

政界の古武者川原茂輔と一騎打の勝負は天下のフワンに手に汗を握らしたものだが、普選の潮流はふるき唐津港をも訪れ遂に森を最高點として、落選は免れた川原を、はるかに見下したことの政戰結果は、彼の男をあげさしめる事數段たるは勿論である。

彼は滿蒙開發の先驅として又殖民政策には得意である。彼が未だ志を得ずして滿蒙の奥深く入り込むで居る時、遂に久原房之助に認められその後援を得る事となつて滿蒙調査（十三部隊）を組織して極力滿蒙の調査に着手したものだ。その時彼は苦心の結果。青城子鉛銀鑛その他の鑛山を發見する事が出來たのであるが、然し折角發見した青城子鑛山は、一技師の爲め妨げられ遂に久原の手に歸する事が出來なかつた時の彼の失望落膽は想像に餘りある、そこで彼は緊褌一番獨立經營の任に當つたものであるが彼の明識あやまたず、青城子鑛山は忽ちにして聲價を揚げたものである、然し久原によつて始めて彼の手に入つた鑛山である以上利益を彼の專斷に委するの切なさを感じ利益半々の共同經營の大廣量を見せたる彼の眞價は反つて久原房之助を惚れ込ましめ彼との親交は今日迄續いて居るのである。

彼は前回の選擧にも同じ東松浦郡出身の川原茂輔と戰つたのだ。今回の中選擧とは異り、火の出るような一騎打の勝負、何れ一人は落ちなくてはならぬのである。當時まだ名の知れぬ少壯政治家と中央政界の古武者との對戰だ、憲政會の選擧本部さへこれを重視せず從つて公認もせず、又た援兵をも送る事に於て氣乘り薄でもあつたのであるが、斯る事に對し勇氣百倍するは彼の特性である單騎よく敵の牙城に迫つて奮闘努力、その政戰結果は、惜しや百數十の差を以て敗れはしたが當時の川原の勢力に對し彼の善戰は如何ばかり同志をして地ダンダを踏しめた事か。

由來、佐賀の地は政爭激烈を極める點に於て著名である。巨人大隈を產み武富時敏を有して居る佐賀はモト〳〵憲政派優勢の地であつたがしかし現實は政民の勢力相伯仲し政爭いよ〳〵繁からんとするものある。彼は四十代の働きざかり加ふに細心にして且つ太ツ腹、その縱橫の手腕は早くから認められて居るだけに、彼の今後の努力に俟つものが多いのだ。民衆の味方としての彼れの今後はけだし刮目すべきである。

名を刻せむ

山王の臺

小泉又次郎氏

普選の勇士としての小泉の名は、副議長としてよりも、今後或は就であらうところの顯要の名前よりも一般的であり、彼れの精魂の盡きざる限り、彼れの胸から取り消すことの出來ない刻印であらう。實にや芝公園に赤坂山王臺にまた上野の兩大師前に、苟くも國民大會や憲政擁護の大旗が、勇ましく飜るところには、彼の名の轟かぬ事とてはない。彼れが鐵の如きからだは、降旗元太郎、田中善立賴母木桂吉、横山勝太郎等と共に、普選を盛立て國民に政治の素地を造らせて、今日尠くとも憲政大道を踏んで謬まらぬかの如き時勢を來す爲め犧牲に供せられ來つたのである。

かく考へる時に吾人の思ひ出すことは、米國ワシントン市の造られた理由が、政治市並に政治的名譽の市たらしめんにあつたことである。ワシントン・ホールやリンカーン・メモリアルの存在は、果して何を暗示するか。今日吾等が赤坂山王臺上に、政治的偉動者の名を殘さんとならば、彼れ小泉の魂魄をこそ銅に鑄りて、後人に傳へ且つは壯心を皷吹せねばならぬ。

政治的彼れの氣魄はまた世を渡り功を遂ぐるの鑑とするに十分である。彼れは常に元氣に滿ち禍を轉じて福となすの、妙諦を心得ていつもこれを實行に移してゐた。彼れの悲觀した顏や悄氣た顏色を見たものはない。彼れの瞳は常に太陽の如くに輝やかしい。そして氣輕で仁俠で、自らを肥やす爲めに、財寶を惜しむが如きことは少しもないのである。

彼れは勿論明治の生れではない。然し年齡だけで老いと若きを區別することの出來ないと云ふのは、彼れにとつて眞理である。彼れは自ら青年と共に談ずることを好み、よく誰彼を連れにしては、胡座をかいて牛鍋をつゝくといふやうなことをやつて、ともすれば古くならうとする、自分の頭に生新の薪を加へ、また年輩政治家の頭に新しい空氣を注いでゆく事に專念するのである。だから護憲內閣當時かれに振りかゝつて來た副議長の榮職なぞといふものは、彼れの如き淡白で名利を趁はぬものにとつては有難迷惑だつた。それでも已むを得ずば『野人禮に慣らはず――』――、諸君の厚意に酬ゆる能はざるを遺憾とする』てな挨拶をして滿場をヤンヤと云はせ、山王臺副議長の名を止めたのも、確に彼れの身上であつたのだ。

今や彼れ新生民政黨幹事長の任にありて鐵中の鏘々たるもの、やがて濱口內閣ならん日に、その一角を固むる守護神たるは云ふまでもない。

民政黨の堀り出し物

三八

杉浦武雄氏

蓬髪禿らず、素服顧みるところなき朴訥の青年紳士杉浦こそ、民政黨若手切つての新智識であり、闘士滿々たる議政壇上の雄である。

彼れの世間放れした放れ業は、しば〳〵珍談製造の種を蒔いて、時に色んな噂を弘げて行つたのであるが、素よりそれは無邪氣で愛嬌あるものであつた。今や彼れ弊衣をさへ纏ふの遑なく國事に盡し人の世話を焼き、旺に新知識の吸引に努めてゐるが、彼れの抱懷するところが民政黨の新政策に、その內容となり形となつて現はれたものも決して少くはない。

東京帝大を卒業して、暫く朝鮮總督府に役人生活をやつたが、早く辯護士を開業して一方國家の選良たるの名譽を贏ち得た。惟ふに今後の政治界に、殊に新興政黨と對抗さすに適する者は彼を措いて他になく彼の新思想は以てよく社會的諸政策の問題が協議せらるゝ場合甚だ役に立つので、彼れの貢献する所はけだし非常なるものがあらう。

機を見る敏

小俣政一氏

警視廳對小俣政一との喧嘩は、根が市民直接利害に關係を有する、東京市のお父さん西久保市長排斥問題に端を發して居たゞけに頗る緊張味を加へたものだ。均整を缺くところの彼の眼容、よく當時の輿論の流れを透視してその處するに道を誤またず、從つて彼の五尺に足らざる體軀よく矮少人ならざる事の存在を鮮かに確保した彼の手腕決して凡でない。則ち警視廳久保田刑事部長との男らしい喧嘩は反つて彼に幸し大向の喝采を博し得た。

彼は、市會に於ても一方の闘士で、その活躍めざましく、殊に今回の普選で本所深川から最高點で當選した彼の得意思ふべしでもあるが、然し彼は醫士としてよりも政治家として將來延びる素質を有して居る、特に小泉又次郎氏などは彼の將來に多大の期待をもつて居る。

闘志滿々、そして機を見るに敏なる彼、民政黨に於ける第一線の闘士として必ずや相當の地位を占めるであらう事が想はれても居る。

剛腹剛直の大雄辯

武富　濟氏

手古摺り拔いた大逆事件の調べ上げに、幸德秋水、菅野菅一派に本音を吐かせて、一擧にして名檢事の名を走せた彼れ武富は氣轉が利いて雄辯で、政界の汚濁を一洗せんず大使命を負ふて起てるかの如くである。

しかも彼が、憲本協調の五十三議會に於ては、同僚を拔いて天晴れの懲罰委員長としての重位を占めた事は、當選一回の彼としては未曾有とされて居るほどに、彼の政治的前途は輝々たるものあり、誠に彼等が牛耳る更新會の第一線に起つて政友會の領袖小川平吉老を朴烈問題の法的解釋より決議案を提出して老を窮地に陷らしめ、すつた揉んだの末、老をして遂に壇上で釋明までさした事は政友會側から見ればいかばかり口惜しき事であつたか知れなかつたゞけ憲派のため萬丈の氣を吐いた彼の得意や思ふべしであつたのだ。

黨務と言へば、却々の熱心家で、多忙を割いては地方遊說にも出掛るのみならず、朴烈問題勃發當時は得意の法律論のみならず前記の大逆事件を直接取扱つた自己の經驗から極力政友會側をして顏色なからしむる迄敲きつけたものである。しかし彼は將來の大成を期して十分修練の効を積む事を心掛けて暫くも休むことはない。

天性の酒家で、呑めば即ち一升の酒、醉へば豪快の氣を吐いて倦むところを知らず近來健康上、此の好きな酒を禁めて居るが、然し彼の青年時代は到るところに奇行を殘したものだ、小春の一夜、こつそり檢事局の宿直室から拔けて虎の門鳥正樓上に酒を呼び、セイ〳〵その情緒なるものを味はつた迄は好いが、階下の便所に起つはやり切れぬとばかりに忽ち樓上からの往來に向つて春雨を降らし、折り惡しくも巡廻の查公を面喰わせたなどは、前代未聞の檢事として天下に名を知られたのだ、彼はかゝるいたづらにかけては頗る磊落不羈であつたが、ひとたびまじめな法理論の前に立つと彼の眼光は正邪を誤らなかつた。そして、彼一流の皮肉はよく辯護士連の荒膽を拐いたものだ、彼は號を貫峰と稱し俳句をもよくす、その風流は彼の淸淡なる心事をよく表はして居ると言つても好い、かくて帝國議會は彼を永久に失ふ事はないであらう。と同時に、今後愈々多事多端なるべき法律上の角逐に、先陣を承つて闘ふ武者ぶりの雄々しさを民衆は刮目して見るであらう。

寛厚にして義は固し

俵孫一氏

久しく官僚畑に育つた人が、代議士としての經歴に薄いことは已むを得ない事だ。しかも一度彼れが意を決して、中原に鹿を爭つた時に相手は政友會の島田俊雄、總務としての人望もあり、選擧上手であつた爲めに、彼れは惜しくも敗れたのだ。然し二度目の雪辱戰には、返り討たんと氣ほひ立つた、島田勢を雍伏せて、見事優勝のゴールに入り、見とりの群衆をして拍手賞讃の辭を惜しましめなかつたのだ。

その上彼れは性寛厚にして如何なる場合も紳士の美德を失はず、然諾を重んずる泰山の義の持主であつたので、早く加藤總裁の殊遇を受け、その内閣なるや選ばれて鐵道次官にまでなつたのである。その後彼れは育ちの内務畑に歸り、大藏畑育ちの濱口内相を援けて大いに經綸を發揮したが、若槻内閣の柱冠するに及んで彼れ勿論運命を共にした。そして普選の前衛戰府縣會議員の選擧には、反對黨の干渉壓迫を監視すべき探題の役に東奔西走して、味方を有利に導くことに決して倦む色は見せなかつたのである。

彼れは明治二十八年東大出の秀才だ。此年には總裁濱口、不遇に逝いた下岡、政友會の勝田、民政系の人ながら、猶ほ未だ滿たされたことなき菅原通敬、臺灣總督の山上滿之進、前東京市長西久保弘道等、多くの人材を輩出したのであるが、爾後彼等は後になり先になり、顯要の地位を占めつゝあつた。彼れ俵が宮城知事をしてゐた頃に、大隈内閣に認められて北海道長官西久保弘道氏が警視總監に任命された時、彼れはその後を襲ふて北海道に赴任し殖民政策を確立し非常なる成績を示し今に到るもその隅々まで、彼れ俵の名を知らざるものないほど名長官たりしが、寺内内閣を經て原内閣成るに及び、席を後進に讓つたのである。山本内閣の時更に時の翰長樺山が、親友の故をもつて彼れを拓殖局長官に推薦するに遭ひ、浪人も長くせずして引續き宮仕へする身にはなつたが、かく方面から引張り凧にされるのも、彼の人物が確りしてゐて、至公至平で義を重んずるからだ。四十年の官僚生活は、それでも少しも彼れの民衆的であり人に交はつて敦厚なる性格を蝕んではゐない。政黨生活幾許ならずして黨人の要諦をよく呑み込んでゐる。彼は目下總務の重位にありて聲望いよ〳〵高く、民政黨内閣成るの日、彼れ又た大臣の榮冠を獲る有力なる存在を確保して居るのである。

支那問題の權威

赤塚正助氏

元來が野人

霞ケ關には、自ら霞ケ關型と稱すべき一種の型がある、しかしながら彼は、此の型から脫出した異彩で、所謂る、東洋豪傑肌の快男子である。

美句辭麗に巧な、ハイカラの洋服を着てそしてダンスや音樂に造詣の深い連中とは大分の距離があるほど彼は元來の野人である。

磊落不羈、名利に恬淡である、呑めば斗酒敢て辭するところにあらず天下を論じ國家を說く。支那に永く居たゞけあつて豪傑連と尠からず親交がある中にも龍濟光督軍などゝは相許して居たものだ。奉天總領事當時はさすがの張作霖も彼に一目を置き、又た張作霖よりは絕大なる信賴を博しもして居た。從つて對支政策上の難關は彼の力に俟つものゝ多かつたほど成績の見るべきものが尠くなく且つ彼の烈々たる氣魄はよくその所信を斷行するに毫も妨げないのである。

墺國公使を最後に外交官の足を洗つた時には誰一人として彼を惜しまないものはなかつた、彼は實に支那問題の權威で、張作霖關係に於て第一人者であつたからである。當時、霞ケ關、一段の寂寥を加へたものだ。普選の潮流は、彼をかつて政戰場裡に送つた。そして鹿兒島第二區に於て美事最高點で當選の榮光を浴び天晴れ、普選議會の人となつた。そして此の下院第一流の外交通を迎へた民政黨は、今後彼の献策に俟つ事の尠からざるを期待して居る。

言ふまでもなく、對支外交は、何れの內閣に於ても之を重大視して居る。列强監視の大舞臺、そして猫の眼の廻るような北京政局の推移は決して油斷も隙も與へぬだけやゝもすれば外交上の危險性を多量に釀成する事は免かれぬ。

思ふに、今後外交問題の第一線に起つ彼は、必ずや國家に貢献する事の尠からざるものあると共に、反對黨の對支政策を糾彈する事に於ても痛烈を極める事を思はしめて居る。濱口內閣の外務政務次官は動かぬところで、從つて彼が眞骨頂を發揮する日の決して遠くないであらう事も信ぜられもして居るのだ。

膽斗の如き手腕の人

賴母木桂吉氏

道の光明を導いたのは實に彼等の力だ。苦節十年の憲政會の非運は、よく彼等の爲めに輓回されたであらうし、政局擔當者としての憲政會は、また彼等によりて健剛なるを得たではないか。そして民政黨なれる今日も、依然として彼等は相倚り相扶くる一黨の重鎭である。

賴母木は必ずしも辯論の雄ではない。然しながら口を開けば一個の政策を語り、一大結論を民衆の頭に植ゑつけぬと云ふことはない。彼れの眞骨頂として認むべきものは、實は周密の籌策を凝らして、一たびその決着點に到達すればこれを斷々乎として實行に移す、勇氣と手腕を保持することである。由來政界のことには決意と斷行とを必要とする場合が却々に多い。智識博大にして性情溫良なものは、ともすれば遲疑逡巡の譏りを免れまいものであるが、彼れの圓滿なる常識謀將安達の影には、いつも絕大な實行力に富む彼れ賴母木が跟いて居た。複雜な政界に荊棘を開き、たとひ萬難ふりかゝるとも、よくこれに堪へて暗黑の間から、一に加ふるに膽斗の如きものを賦與せられてゐることは、天の彼に惠む偉大なるものがあると云はなければならぬ。

彼が岩丈なる軀幹には、泰山倒るゝもゆるがぬ大度大膽が包藏されてゐる。その燦く明眸には才人の閃きがこぼるゝばかりである。事實彼は才藻と度胸とを以て、新聞記者から進んでかゝる事業の經營者となり、また實業界に手を伸ばして、そこでまた重要な地位を占めたのであるが、その間東京に市會議員となり、淺草に區議となつて具さに地盤の開拓に努むるなぞのこともあつて、今や代議士に當選すること五回、働きざかりの渾身の力を、民政黨の爲めに捧げてゐるが、そのこれが爲めに、反對黨にとつて彼れ賴母木の存在は却々に忽にすることの出來ね大敵であるたま〳〵ほじ繰り出した黑部川水電問題の如き何等根も葉もないことは矢張根も葉もないことである。かゝる事件に傷けられ。かゝる風聲鶴唳に、胸を轟かすやうな彼れ賴母木では斷じてない。鞘ばしる秋水三尺の冴えはありとも、血も涙もあり世間の情理をわきまへた賴母木の政治的將來は、けだし端睨をゆるさぬものあることは一人彼を知るものゝ云ふところのみではないのだ。

俊敏と精進力

筆、舌、力の三拍子

中野正剛氏

今日の中野は、政治界、ドノ方面に廻しても立派の流行兒で、そして腕利きである。彼の大雄辯は底知れぬ井戸から滾々として迸る泉である、彼れが一管の才筆は、天を描けば龍を、野を描けば虎を躍り出さしめずしては措かぬ。經世濟民、しかも惰夫をして起たしめるに十分である。

五十二議會に於ける中野の活躍は實に凄じいものがあつた、即ち政友會の新總裁田中義一大將、に絡まる陸軍機密費問題の提案をなしては彼は斷乎たる決心の下に敢行した、そしてその扇正を叫むで第一線に起つ中野は飽迄正々堂々の陣を張つて追擊また追擊、これがため政友會の陣容は大潰亂に陷つたことほど、當時の大接戰に於て、如何に彼の抱懷する決斷力と猛進力の旺盛なりしかゞ窺はれもした。

また、その次期議會に於ては樞密院の改革を絶叫して立憲政治のため萬丈の氣を吐き、天下の共鳴と喝采を博しなどの事は、餘りに明瞭すぎるほど明瞭の事實である。

中野、永井を稱して黨、切つての二大雄辯家として居る。永井柳太郎の美辭麗句は恰も音樂を奏する如く聽者をして恍惚たらしめ滿堂を魅了さして居るが、中野正剛のそれは、一言一句烈々として舌端火を吐くに似たりその肺腑を貫くの辯は必ずや何ものかを民衆の頭に印刻せずには置かぬ

彼は今回の選擧には政府及び與黨方面から覬れたが、しかし彼の氣魄はこれを一笑に附し何等介意するところなく、同志應援の爲め東奔西走、己の選擧區を顧みるところなかつたゞけ、政友會全盛の福岡の地に於て、あれだけの成果を示したのは畢竟、彼の努力の賜であると言つても差間へないのだ。

殊に彼の率ゐる遊説部は、決して烏合の集團でなく、彼に共鳴し全國から集まつた憂國青年で堅められ、そして普選には身命を賭して働いたものである。今や展開せんとする倒閣運動に對してもその遊説隊の活躍の華々しさを想像されもするが何れにしても、彼はよく政界の事理に通じ策を樹てゝこれを實行に移す。かの全國に配布した所謂民政黨のパンフレツドなるものは何れも彼の考案によらぬものとてはないのである。

彼は黨代表演説の起草者でもあれば、遊説部長でもある。政局不安の今日彼の活躍に期待するところ大なるは今更言ふまでもない事だ。年、わづかに四十を出でゝ、新時代の理解を忘らぬ彼が如きは蓋新進中屈指の傑物たるを失はないであらう。

背後の力

富田幸次郎氏

憲政會の前身、同志會の時代から、黨内に轡を並べた二俊秀があつた。一人は今日の筆頭總務安達謙藏氏で、も一人が、この富田幸次郎氏である。安達が連續的に代議士たるを得たのに反して、富田は不幸、落選の憂き目を見たこともあり、護憲運動の眞只中に行はれたあの清浦内閣の總選擧にも、出ることが出來なかつたので、著しく驥足を伸ばすことが出來ないでゐた。

幸に補選のことあつて本陣に列するを得た彼れは、憲政會内閣當時に黨本部の留守を預かつて萬違算なきを期しつゝあつたが、民政黨新しく成るに際しても、彼れは總務の椅子を占めて今やその重鎭である。卽ち向後のことも推知するに十分であるが、その榮達を望むものは、ひとり彼を中央に送り出した選擧民のみではない。

しかも彼れは名利に頗る淡白である。責務を負ふてこれを果し、精悍慧智、水も漏らさぬ用意と奮闘力とをもつて、黨の支柱となり動力となる彼れの手腕力量は、實に大したものである。

加藤伯もその才力を愛してゐた。彼れまた總裁顯貴の前にあつて、侃々愕々、所信を述べて少しもひるむところはなかつたのであるが、これが爲めに蒙る彼の寃罪の如き彼れとしては全く顧みる所でなかつた。たゞ黨、これを一にして、自らは全く犧牲たるに甘んじたのである。

かゝる態度を以て黨務に當つた幹事長時代の評判は非常なものであつた。名幹事長の名、今に傳はるも決して偶然ではない。六分の俠氣、四分の熱といふ言葉があるが、彼れに於てその眞髓を見る。大膽にして精緻、名聞に捉はれることがないといふから、そのなすところ知るべきのみであるが、今後、黨としては彼れのこれまでの功蹟を認めて、黨における總務、政權を握つた曉における榮譽ある地位におくであらうことは、明かである。

彼れは土佐の產にして總裁濱口とは鄕里を同じくする。政治家の先哲板垣退助を出した南四國の地に、今日彼れ濱口と富田とを有することは決して偶然ではないが、同鄕の誼は、兩者の間親交愈々密なるものあるべきは當然であると同時に、兩者相双んで今後の政界に雄飛せんことも想像に難くないのだ。

民衆の友

滿身是赤誠

横山勝太郎氏

短軀五尺、小身なれども精悍の氣は、自づから眉宇に動いてゐる。やゝ白くなりかけたあご髭に、無限の愛をふくめて東奔西走する彼の活躍、實に憲政會幹事長時代の彼れ横山のはたらきは、愛黨心そのものであつたのだ。久しく芝に住んで辯護士業を營み、東京市會議員として市民の味方たることまた多年、正直で徑直で潔白で、彼れの操志、一度としてけがされたることを吾人ば耳にしないのである。

さればこそいつ、いかなる選擧の場合であつても、その理想を口にするものと、實際を說く者との別なく、彼を擔ぎ、彼を民衆の味方たらしむることに於て、一言異議を挾むものとてはない

明治十年、西南役の砲火を合圖に生れた、といふわけではなからうが、彼の鬪士の滿々たる、わけて破邪顯正の戰ひの爲めには、正義の軍の爲めに起つワシントンの如き熱血を迸らせつゝ、口舌に鞭ばしる三尺の秋水こそ、彼の菩薩心から、涙もて洗ひ出さるゝのだ。それは確かに惱めるもの虐げらるゝものに對する助太刀なのである。

惡きを挫き弱きを扶くる民衆の集まりの中に、彼の名がひと度傳はるや大勢は歡呼をあげて彼を迎へたのだ。震災で燒けた時の住宅兼事務所は新に再築さるゝ餘裕すらなく、燒けあとの外廓をそのまゝに、うちにバラックを組みたてゝ膝を容るゝの所とし、朝早くから黨務に疲らしたからだを休めるいとまもなく、彼は自宅に於て押し寄せた、面會者に應接し、私事の如き全き省みる際とてはないのであるから、芝の神樣として畏敬せらるゝ所以のもの、また決して偶然ではないのである。

横山の四圍に群がり來る人はなかには區內の有志もあれば地方の陳情者もある。國事に選び出された彼が、かくて國事に多忙なのは彼もまた慰むに十分ではあるであらうが、多數の訪客の中には、私事を並べる人も決してなしとしない。けれども彼れ横山の慈悲の眼は、これをしも無下に斥け去ることはないのである。住宅問題の解決に彼れが一肌ぬいだことは、新しい社會問題に對する彼れの理解と熱誠とを物語るもので、震災後廢止と決定した急行列車を、再び新橋驛に着けるやうにしたのは、彼れの行き屆いた配慮の賜ものである。かくて綱紀肅正第一線の鬪將は、世故に碎けたわけ知りであることを如實に物語つてゐるのであつて、議政の府の驅引や、故實にも慣れてゆく彼の將來こそ、確かに世人の刮目に價するものがあるのである。彼れは目下民政黨の代議士會長にして綱紀肅正委員長の要位をしめて居る。

雄辯と力量

その凄涼味

櫻井兵五郎氏

今日の代議士も、任期滿つれば平の黨員に過ぎないが、總裁の周圍をめぐつて精根を献ぐるものは、その任期中と雖も、代議士のみではない。強勢なる院外團の一擧手一投足は、黨の運命を開拓し、また閉塞もするのである。

何となれば院外團の陣營には、勝敗は兵家も知る能はずとあつて、不幸當選の機會を得なかつた濟々たる多士が、また多く英氣を養ひつゝあるからである。

然しわが櫻井君の如きその隨一であり、石川縣から選ばれて當選三回を重ね敏腕の譽れ高かつたものであるが種々なる都合あつて。

それが暫らく、池中の龍と潛み、院外團の總帥として加藤政之助、鈴木萬次郎氏等先輩の後を繼ぎて、よく院外の活躍に才腕を振ひ、殊に政府彈劾の急先鋒となつて、形勢を有利に展開さすなどその行動決して端睨を許さざるものあり、名院外團長の稱を得たのも偶然でないほど機智縱横行くとして極めて可ならざるなきとは彼の事であらう。普選の唱導者に依つて蒔かれたる種子は普選の栽培者によつて苅り取る事は極めて自然に屬す、政治的生活に劃期的新局面を展開する最初の普通選擧に當り、彼れまた鄕里より推されて中原に鹿を追ひ、遂に選ばれて普選議會に於ける光榮の議席を贏ち得た事も彼に酬ゐられる當然の順路であるに違ひない。

從つて民政黨に在つては第一線を堅める鬪士として、是非なくてはならぬ人物で、院内外の掛引万端ものゝ美事にやつてのけるに毫も疑はないのである。

その熱辯の滔々たる態度の堂々たる、押しもあれば張もあり、並びすくないと迄稱されて居る農村問題に關する造詣なか〳〵に深く平素理解と研究を怠らず、特に財、經問題は彼のもつとも得意とするところこれ等を提げて起たしむれば何人の追隨も許さないであらう。

濱口内閣成るの日、彼また政務官候補者として有力なる存在を持して居る。最近の著に「日本打開論」あり。今や當選四回を重ね黨の樞軸たり。

清節倦まず

普選の殊勳者

田中善立氏

生命を賭して民衆の爲めに鬪ひ、幾度び不法の監禁を受くるも敢て辭するなく、普選獲得第一線の戰士としての田中の名は、苟も政治を談ずるものゝ、暫くも忘るゝことは出來ないところだ。

嘗ては日比谷公園の普選大會の砌りに夕暗に乘じて襲ひ來つた警官の一隊は、彼れに突然暴力を加へて負傷せしめ、天下の大問題を惹起したこともあるが、また或時は迫害を受けて演說會場からトラックで警視廳に送られ、その穴倉で荊の冠をかぶされたこともあるのである。當年の同士小泉又次郎や大竹貫一は、これを救ひ出す爲めに晝夜を措かず、努力奮鬪したこともあつて、かゝる間に養はれた彼れの愛黨心と友誼に厚い精神とは、今日の彼れをして大山くづるゝもゆるがざる大度胸と、濁世にあつて身を清うする士君子の範に慣れしめたのである。首相若槻、鈴置次官のなきあとに彼れを起たしめて、次官の椅子を與へたのも、むしろ甚だ遲かりしと云はねばならぬ。何となれば彼は早く大隈内閣の海軍副參政官にまでなつて居り當選五回、憲政會の爲めには大功を樹てた人物であるからだ。されば普選によつて天下の形勢定まる日に、彼れの榮達はまた期して待つべきだが、彼れの心事を以てすれば、淡々としてかゝる名利に拘泥はすまい

『天下に事を成すならば、健康であることが第一だ。』と彼れは常に云つて居る。そして松葉食を實行し、また人にも宣傳してゐるが、彼れが鎌倉の寓居に綠したゝる、松葉をむしり取つては朝な夕な、ムシヤ〳〵嚙みしめては、

『松葉を喰てゐると頭腦もよくなり、またからだも達者になる。胃腸の工合は殊更よい』と得意になつてゐるあたり、松葉居士の名、又一世に高き事も偶然にあらざるを思はしむるものがある

憲政會の最も悲況時代に、彼れは安達の後を享けて黨務委員長となつたが、こと一度黨の盛衰並びにその結束に關はる問題だと彼れは極度に愛黨心を昂揚させ、その普選戰線に立つと同じやうな熱心と誠意を傾けて、晝夜の別なく奔走した。その甲斐あつて憲政會は、如何なる時代に於ても第二黨を下らず、今日久しく第一黨を持續して溢ることなき素地をこしらへたが、正直で眞面目で、政治家の通弊として世上に醜を傳へるやうな振る舞は、藥にしたくもない程の彼れの信望こそ、民政黨における一服の清涼劑であることを世人は銘記しなければならぬ。彼は目下黨務委員長の重位を經て右き普選内閣成るの日は大臣候補者中有力なる存在を確保して居る。

至人の域に入る練達

中村啓次郎氏

み誤つたか前々回の總選擧には、不幸落選の憂目を見たが、土を拂つてミツ締め直すと、さすが政界一方の立役者である。その次には樂々と當選して、本黨内に床次を護る、節操蘭の如き高士として奮鬪し來つたのである。

床次毫下の三羽烏と謳はれて、三寸の舌頭火を吐くの辯、政界切つての敏腕家、中村啓次郎の名も久しいものだ。和歌山市は彼れが搖籃の地であるに拘らず、どう踏

二大政黨對立の機運は、憲法布かれて四十年の日本に澎湃として起つて來たが、これに乘じて打ち立てられたのが實に立憲民政黨である。床次を擁する一人として、どうして人に遲れをとることがあらうぞ。彼れも亦時勢を洞觀する明徹水晶の如き達人である。しかも政黨界のこと、所見を同じうすれば肩を叩き手を握つて、共に國事を談ずるが至公至明な態度である。勁直勇行のライオン總裁始め床次氏の爲めに、彼れが粉骨碎心を期するもまたうべなるかなだ。

彼れが辯舌の雄者たることは前にも述べたが、内容豐富奇警百出、その取材の多方面なることに就いては萬人等しく、驚異の眼を睜るのである。何となれば彼れがとつてもつて立ち向ふところの武器は、外交問題であれ。經濟問題であれ、社會問題であれ、行くところとして可ならざるはないのである。しかも鐵道問題の詳細に至りては、玄人の域に達する程の研鑽を積んでゐるのである。西園寺公訪問の政客にも各種の人があるが、彼れ、中村の談論は一世を貫く經綸と、至誠とに充ち溢れてゐるので、園公もまた膝を進めて彼れの所論に耳を傾け、時に難攻の數言をさへ費すといふ噂は、彼れなればこそ、と肯づける節も多いのである。

人物としての彼れは多趣味多方面で、武道に秀で、文筆に長じて、その書はまさしく大家の列に入つて居る。即ち性格の枯淡なる推して知るべきであるが、人間にかれ切つたところがある上に、世間を知り、人情を解する血と涙とのあるのが達人の達人たる所以である。彼れもまた、嚙めば嚙む程甘味ある、人間味豐かな政治家である。

新進氣鋭

奇智氣轉

田中萬逸氏

田中君は若いから、黨内では總務、天下をとつた時には政務官、まだまださう急ぐに及ばぬと、云はれてゐてもう四十五の働き盛りだ。それに當選五回の場數を踏んでゐる彼としては、選擧區民の望みもあり、さう謙讓の美德を發揮してばかり居るわけには行くまい。大阪府下の政戰最も激しい處を地盤にして、區域こそ違へある所では、政友會一方の御大中橋德五郎氏や、また紫安新九郎氏なぞが度々ドヂを踏んでゐる例にも似ず、悠々と當選を續けてゐる彼れの人氣は大したものだ。

黨内に於ても、若手、且つは氣轉の利いた俊才としての譽れは高い。そして第五十二議會に於ては、尠くとも院内總務といふ重職に据つて、院内の馳引萬端、もの〻見事にやつてのけ、天晴れ名將の讃辭さへも、贏ち得、今また小泉氏の後を繼ぐ幹事長として有力候補者の一人である。若し夫れ彼をして一度び舌を鼓して立つ壇上に上らしめんか、雄辯宏辭、肺腑を貫くの辯は學堂尾崎と思はしむる風格があつて、聽衆悉く魅了されずにはゐないのである。それもその筈で彼れが報知新聞の記者時代、學堂月旦の一篇を草して非常に氣に入られ、恰も末松謙澄が伊藤公を評論して、その文才を認められて以來その女婿となつたのと因緣相似たものがある。

しかも、彼れの名文家としての價値を知つてゐるものは尠い。そして國防問題及び農村問題に關する造詣甚だ深く、これを提げて起たしむれば、何人の追髓も許さないであらうことは敵も味方も、今後は決して忘れることは出來ぬ。既にこの内容あり、この辯舌を備へてゐるから、遊說地の青年なぞ、全く彼れに參つて了ふものがあると、副議長たりし半島小泉又次郎氏をして裏書せしむるのも、また故あるかなである。

彼れは早稻田に學んで最高の教育を受けたが、一時は土に親しんだこともある彼としては、農村問題に理解と研究とを有することが餘りに庚突ではない。土にまみれた、手を洗つた後に新聞記者としての彼れは、麗妙の筆、よく雲上の記錄を草して聊かも滯ることはなかつたのである。以て彼れの才能を窺知すべきだが、前途春秋に富んで奇智縱横、押しも張りももある彼の今後はけだし刮目に價する去る議會の終つた後に出蒐けた歐洲漫遊の旅は、彼をして知見を廣め、時代に通曉せしむる十分な機會であつた。爾來彼れの一擧手一投足に、一段の莊重味が加はつたと云ふ人の多いのも、決して溢美の言ではない。

創業の才

ズバ抜けた

本多貞次郎氏

讃岐の金比羅や蠣殼町の水天宮に比べて見て、成田の不動の賽錢は、決して勝るとも劣ることはないのである。

そこに眼をつけたのが彼れ本多で、京成電氣を造つては參拜の客を送り、北總鐵道を敷いては遊覽の客を迎へるといふやうな寸法で、彼はメキ〳〵と財力に伸びて行つた。その創業の才と財力とを傾ける時に、彼の企劃は一として成らざることなく宇都宮市に生れて千葉縣に地盤を開拓した彼れの手腕は、幾多の苦い經驗と、貧窮を具に嘗めて來たところの、血と涙とに濡れそぼつてゐる。

けれども歩一歩、彼れの事業が成功するにつれて、彼れもまた凡骨ならず、政界に足を踏み入れようとして、先づ縣會議員に打つて出で、その議長にまで選ばるゝの信望を贏ち得たのである而して中央政界踏み出しの第一歩は、大正九年の總選擧に、政友會を名乘つて當選したのに始まるが、政友會分裂するや吉植庄一郎と共に彼もまた本黨に走つた。しかも彼の開拓した強固な

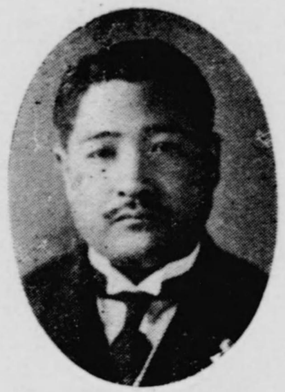
地盤は、よく人の窺ふを許さずして第三回の當選を重ね、床次を擁する金力の援護者、節操固き古武士として尊敬されて來たが、時局幾變轉する間に目先きの利いた吉植は、多くの同僚を殘してまた政友會に逆戻りしてしまつた。

然しながら彼れ本多は、床次一門の爲めに殉ずべく決心して眉一つ動かさなかつたのである。そして會計監督といふいはゆる政黨の賄方を引きうけて、今日まで尠からざる財寶を黨の爲めに捧げて來た。それが今や民政黨組織成るに會ふて床次氏等と行動を共にしたのであるから、民政黨にとつては蓋しドル箱が轉げ込んで來たやうなものである。

由來政治家の貧乏にして財力に惠まれざる、日本の政治家たると外國のそれたると少しの變りもないが、政黨人としての第一人者は最早や職業政治家にあらざれば、よく精力を二三にするが如きことは至難である。彼れはこの範疇からは却々に遠く、今日でも財政的に不斷の伸張をつゞけてゐる人物であるから、彼れは最早やなくてならぬ人物で、この彼れの特長は彼れの世渡り上手な、世故なれた態度と共に、黨内外に一段の重きをなす所以でなくてはならぬ。

黨務、妻帑を念とせぬ

粟山　博氏



と、憂世慨國の義氣とで一ぱいだ。

官憲の背景を楯に、內務省土木局長としての堀田貢を見事に屠つた白面の彼れ粟山博の心中には、選擧民の好意に酬いること

さすがに河野盤州の義を擁する福島縣人の意氣も偉いが、大物を向ふにまわして恐れず、勝つて驕らぬ彼もまた大隈老侯の薫陶をうけただけに決して凡物ではない。

早稻田時代から雄辯家の名は、米國留學中更に思想的背景を深めて、今や押しも押されもせぬ議政壇上の闘士であるが、彼れは讓つてよく人より先きに功名を競はうとはしない。彼が平日何よりも先づ心掛けてゐることは黨務だ。

政黨人としての培ひを忘れぬ彼は、今黨務副委員長としての職を大切に勤めあげてゐるが、當選三回を重ぬれば次回ごろからは、定めし彼の眞骨頂を發揮して來るであらう。

機を見るに敏である、彼の體軀は、活々として常に動いて居る。働いて居る。そして事に臨むで、よしやその事柄が失敗に歸しても、彼は決して悲觀した顏を見せた事がない。只だ己の力足らざるを感じ一倍の努力と熱度を加へて猛進する。

力の政治家だけに敵も尠からず有して居るが、然し彼と一度、膝を交へて談じて見ると忽ちにして彼の純情は、肩を敲いて語るの友たらしむ。さすが巨人大隈侯の息がかゝつて居るだけに正義人道——道は世界に通ずテな、大理想を潛有し、又た鄕黨の大先輩河野盤州翁の感化を人一倍に受けて居るので、利慾に恬淡にしてアノ利權熱の旺盛なる福島の地に於て、一度として彼の操志のけがされたるを吾人は耳にせぬ。從つて最高幹部の信賴も厚く貧乏はして居るが、先輩や知己や青年達の面倒はヨク見て居る、彼の補資に依つて、彼は一醫學博士を世に出して居る。大隈信常侯始めその他の先輩が彼にすゝめても妻帶を肯じない。太刀打を望むものも尠からずあるが何れも一蹴されて了ふ。

今回の選擧では福島縣第一區から最高點を以て普選議會の議席を贏ち得た。殆むど理想選擧であるだけにその當選に意義がある。

彼は今や當選三回を重ね民政黨の中堅である支柱である。濱口內閣成るの日、彼れ又た政務官候補者として有力なる存在を占めもして居る。

縱横の策才 また敏

櫻内幸雄氏

實業界に俊英を謳はれ、多くの會社に關係して、或は社長となり取締役となり、陽氣發するところ事業の成績が擧つてゆけば、また財寶を積むを難事としないのであるから、彼の手腕のメキ〳〵と延び、その身上は日に〳〵太つて行つたのである。

何でも彼れを文筆の業から實業界に拾つたのは、當年の奇傑雨宮敬次郎で、その指導誘掖を受けては素地はあるなり修練の功、人に倍して進むものがあつたといふのは蓋し後年の說のみではないのである。初めてその政界に足を踏み入れる時には選擧區の都合上、政友會に入黨したが、その彼れの敏腕は時に誤解を受けて川原一味と共に、脫黨するやうな立場にたち到り、本黨に入つて政治的經驗の第二歩に踏みこんだのであるが、當時の床次總裁、彼れを重用すること厚く、憲本合體當時民黨に、本黨系から入りて幹部の範に列し、一黨を切つて廻す幹事長となつた彼れ櫻内は、何といつても當代稀に見る傑物だ。通信記者から身を起して一度は總務、一たびは幹事長にまで擢用せられたのである。寡默實行、腕と頭との併行したる實務家としては、代議士中多くを探し求むることは困難であつて、その計數に明るい點に至つては、さすが實業家出としてのお里を思はせぬでもないが、將來の財政當局および實業當局は、彼れを根幹として迎へねばならぬやうな時機に遠からず逢着するであらう。

民政黨はけだし本黨系から、彼れを精美であり、第一者として迎へ入れたに相違ないが、たとひ本黨に於て總務並に幹事長の經驗はありと云ひながら、尋常一樣ならば、第一黨の幹事長にわづか當選二回の身を以てしては、さう易々となれたものではないのである。憲政系にも本黨系にも、政友會のいはゆる大幹事長主義に、相對抗するほどの人物は他に多くを求る得ぬことは勿論である。然しながら民政黨はあらゆる舊弊になづむ既成政黨から甦生して、民衆の暖かき抱擁によつて健全に、そして優秀に太つてゆかうとする政黨である。民政黨は古くてそして新しい。宜なるかな彼れが如き新人にしてしかも練達堪能の士を擧げて一黨の重大責務に當らせたことは言行を裏書きするものだ。彼れや、實業界になほ無限に伸ぶべき羽翼をもつて、政界の事を學ばんとするは聊か惜しいとの評をなすものもあるが、齡四十八にして春秋に富む、斯界に於ける大成も、また期して待つべきのみ。

闘志満々

幅廣の底力

三木武吉氏

長の椅子まで目の前にブラついたが、そこは前には伊澤多喜男、西久保弘道老が、如才なく座つてくれるといふ筋書でもあつた。

當選四回、といへばさう古い方ではないけれども、押しも押されもせぬ憲政會の中堅で、幹事長の重職も早くこれを勤めあげた。何しろ清濁併せ呑んで、抱擁力が大きい、と來てゐるのであるから、彼が雪達磨のやうに太つてゆくのも無理はないのである。

松本亦太郎博士は心理の講義に『虫が好かぬと云ふのは結局その人の體臭が嫌ひといふことなんだ。』と説明されてゐるが、三木君のはこれと反對で、始めいやがつた人も、あとでは惚々して來るといふのだから仕末がわるい。何かえならぬ體臭を、彼は發散するとのことだ。爪を隠す猛鷙は久しく大藏參與官たることを必要とせぬ。市會議員に嚙りつかないでも、宛として東京市會の大御所たり得るのだ。革新會をその手に操て、危い所市

彼は邊幅も飾らねば、上長に媚びもせぬ、いつも變らぬ野人であつて、闘志満々として漲つてゐる。英國の藏相チャーチルが、飄輕な恰好に満身の勇を包んでゐるのとは違つてゐるけれども、隼の如き眼光に縱横の奇策をほの見せて、辯舌といふ武器までも、彼はチャンと兼ね備へてゐる。代議士になりたてにはあの幅の廣い底力のある大聲で、機を見て發する砲門の轟き、それは野次といふやうな小銃丸では決してなかつたのだ。彼が一擧にして名を得たのも、間髪を容ぬ彼れの神技が與つて力あつたのだ。今は自重して餘程おとなしくなつたが　細心で大膽で、そして張良のやうな策謀を有してゐるのであるから、ともすれば官僚味が勝ち過ぎてゐると云ふ憲政會から彼が如き赤裸々な幅の廣い男を造り出したことは、今後民政黨の强味でもあらうか。

彼れの生れは桃の花咲く四國高松で、早大に學んで學成るの日に司法官となつた。けれどもそれは直ぐ止して辯護士となり、强敵鳩山一郎と選擧を爭ひつゝあつた頃には、地盤牛込の地はもとより、都人の血を湧かせるに十分であつたのだ。前回は選擧費たつた五千圓、他は悉く選擧團の寄附になる理想選擧をやつて美事に成功したが、臨時議會のあと先に、歐米見學に向つた彼れ三木は、歸來新智識を傾けて、政界に一道の先鞭を投げると同時に、民政黨の堅城を固むる一方の勇將となるであらうことが豫想される。されど自重せよ、〳〵。

見事進出

八木逸郎氏

後藤新平子はもと醫家であるが、彼れは早く官僚の畑に入つて黨人としては全くお話にもならぬ。近頃は宮島幹之助博士が同じ民政黨にゐるが、八木の數歩を先んぜるに比すればまだ却々に追ひつきもならぬ。彼れは當選回を重ぬること已に六、憲本を合して民政黨成るの日に推されて早く總務の列に入つたが、五十四議會を前にしては、彼はまた院内總務に擧げられた。蓋し實戰場を踏む堪能の士として、議場の驅け引きにも十分の奇智と敏腕協調力に富むだところがあることの認められてゐるからである。原首相東京驛頭に倒るゝの日に、彼れもまたその信用を博した一人として見送りの列に入つてゐたが、卒爾として起つた事變に彼れが幸に居合せたことは非常によい都合ではあつたが、急所は遂に救ふべくもなかつた。その後彼れの精根を碎くところ

刀圭界、乃至國手としての特種な生活から、政治界に名を成した人は決して尠くないが、わが、ドクトルヤギの如きは餘り多くない。

は床次擁立のことであつたが、それよりも大事なのは政黨界の惡習を一洗するにあつて、民政黨の爲めには既往を顧みる餘地とてもなかつたのである。彼れが獨逸で研究した醫學は血淸についてゞあつたと傳へられるが、面白いことに、彼れはいま政界にあつて血淸の注射をやつてその混濁を匡救する積りであるかのやうに見える。

人間としては極く淡白で、多方面の趣味を解して座談に長じ、人と對座して決して飽かしめるやうなことのない手口ついては、誰人と雖も容易に學ぶことは出來ないであらう。その性格はまた政治的方面にも現はれて原氏時代から政務官就任の交渉を受けたことなども屢々であつたが、官人はいやだとあつて却々に受けなかつた。最早や今日では政務官なぞと、ケチに椅子を捧げて來るやうな沒分曉漢もないであらうが、その大物を、彼れが如何に取り扱ふであらうかは政界注目の的である。何となれば彼れは臨床の醫師としてよりも、グルンドを究めた學者であるに、早くから奈良の市會議員や縣會議員、本業の方でも奈良懸の醫師會員や日本醫師保險株式會社長市の同會長を勤めて見ても、結局政界の頭梁にならずしては已まざるの概が見えるからである。世に文三會《文久三年生の意》といふのがある。同じ生れの政界の人が、政爭をヌキにしての會合であるが、その中には現首相田中義一を始め等も含まれて居るといふのであるから、却々もつて洒落たものだ。そして彼は體量九貫に足らぬ矮少人だか正義に組するとなると重き事その比を見ず頑として座り込むだところはなか〳〵に搖きそうにない。

協調劇には立て役者

武内作平氏

民政黨の財政通には尠くとも今までの閲歴と、政權把持の場合に於ける、その役柄とによつて、世間に早く認められてゐる人も多いのであるが、彼れ武内はまだ大一枚看板といふところまでは今までのところはいつて居なかつた。これからは彼れの時代だ。あらん限りの蘊蓄を傾けて、反對黨の政策に對抗し、また自らの政綱を練つて、天下に呼號しなければならないのだ。

民政黨には更に一人、本黨系からメキ〳〵と財政通として名前を賣り出して來た小川鄕太郎がある。京大教授としての博士小川は、明敏なる頭の持主ではあるが、ともすれば議論の雄であるこれに比べると彼れ武内は、實戰場を踏んで千軍萬馬の間を往來して來てゐるので、何事にも場なれがしてゐて論壇にも實際の事務の上にも、一分の隙を見せぬ堅材である。

その上彼れはあらゆる問題の協調といふことに特殊の才能を有する。護憲内閣成立後に於て

加藤高橋間を奔走して、絶えずその意志の疏通を圖り、政憲兩派間にまた厚意の橋渡しをして、一兎角當時の交渉を平滑に運んだといふ手練の士「である。世間の辛苦を嘗め盡して、人間として至極當りのよい彼れは、敵味方からいつも非常な好意で迎へられてゐたのだ。彼は何んと言つても大阪城下民政黨の重鎭である、そして彼が大藏次官の時に、一寸支部内にゴタ〳〵を見たが然し彼を飽迄信頼した加藤高明伯は斷して第三者の言に動かされる事なかつたのだ。

かた〳〵今日大阪支部の隆盛は去る十一月下旬開催された關西大會の未曾有の盛況なるを見ても窺知する事が出來るだけ彼の功勞は特筆せねばならぬ。彼は古くから大阪に住むで、辯護士界に名を賣つた斯界の古武士だ。そして憲政會支部の創設は彼に依つて行われ今日まで支持して來た彼の努力は並大抵の事ではないのである、彼は代議士に當選する事七回、今や民政黨の闘將として攻防努むる第一線の勇士として數へられて居るのみならず第五十四議會は彼をして各委員長中の最高位にして即ち前大臣の肩書者しくは大臣候補者より外選ばれぬ、豫算委員長の椅子を贏ち得た事は彼の力量から言つて當然でなくてはならぬ、

即ち彼は得意の壇上に於て、現内閣の重大使命たる財界救濟問題等に於て定めし天晴れの委員長振りを見せて呉れた事と思われるだけ、彼はやがて中央政界一角の棟梁たるべき命數が賦與されて居るのである、彼は濱口總裁の信頼が厚い。

節義に固い

壇上の雄

松田源治氏

は先輩元田國東を出してはゐるが、老いの涙のともなれば、子に引かるゝ此の度は、息敏夫の知事復活を念願に政友會に走つたと噂せらる國東だ。そこにゆくと友誼日に渝らざる、彼れ松田の如きは當世得易からざる敦厚の士といはなければならぬ。

西園寺老公とこれが訪客との關係は、冷徹水の如き老公の前には何人と雖も畏敬言葉數も勢ひ尠くなるのであるが、わが松田君に限つて決して左様なことはない。老公またその無遠慮を愛して特別の寵遇を與へらるゝとの事は、彼れの性格から推して左もあるべきだ。

日大卒業の辯護士から身を起して、それも二十一歳の黄口の書生が、文官高等、判檢事登用の兩試驗に、一時にパスする頭のよさを示してからは、尋常ならぬ評判を世間にとつたものであるが、それに傲らず彼れは愈々熱心に勉強した。その上どんな人とのつきあひでも、極く虚心坦壊にやつてのけて、人に嫌はれるといふやうなことが毛頭ないので、あらゆる方面に優秀な地歩を踏み固めて來た。今や彼れ總務の列に加はつて、院内に政府攻撃の雄辯を揮ふと同時に、また院外にあつて、倒閣運動の陣頭に立つであらうことは明らかであるが、その運動よく効を奏するの日は、彼れにまた榮冠の訪づれる日である。如何なる實か、よく種子を蒔くことなくして收獲し得ようぞ、隱忍自重、操志松菊とその節を競ひてこそ、酬いらるゝ時は來るのである。

護憲運動日に旺んにして、政憲足を揃へて歩む時には、本黨の幹部としての彼れの立場は却々に苦しかつた。東京驛頭當時革新クラブの西村に出會ひ、

『君は立派な立憲政治家と思ふてゐたに、何故護憲運動の第一線に起たぬ？』と皮肉られ、

『精神丈けには贊成だ。』と答へ、

『肉體も一緒に行つたらどうだ。』と追擊されるに及んで惟はずとう〳〵逃げ出したとの逸話も傳へられてゐるが、時世に抗することの出來なかつた彼れの當時の心事には、また同情しなくてはならぬ所があるのだ。

『主義は動く』といふのは古今を貫く眞理である。たゞ忠信の言、篤敬の行は移らぬのである。彼れが時非なるもなほ床次を忘れぬ精神は、やがて民政黨の基根に殉じて、その礎を固むると同時に、自ら榮達の階梯を築くものたることを何人も容易に信ずるであらう。

最も堅實な

帷幄の將

榊田清兵衛氏

東北の雄榊田の名も久しいものである。生れは古い元治の始めであるが、實業界に身を立てゝ町會から縣會、それから國會へとすく〳〵と翼を伸ばして來た。時潮に乘つて居たと云へば云へるが、この間拮据經營、嘗めたる辛苦のほどは悉んど傍人の想像を許さないものがある。だからこそ今は酸いも甘いも嚙みわけた、黨隨一のわけ知りであるが、彼れの周密なる思慮とこれに伴ふ畫策は、彼れが本黨にあつた頃から憲政會の安達、政友會の岡崎あたりと比較されつゝあつた。

大局を見るの明は隼の如く、彼れの豫測にして外れることは多くなかつた丈け、彼れは政界にあつて巧者な泳ぎ振りを見せたものである。犬養を捨てゝ政友會に走つた彼れは當時の原總裁からは非常に重要され、小泉策太郎君等とは同日に論せられぬ程の精悍さを見せてゐたのであるが原亡き後は努めて將來のある床次に接近し、豐富な蘊蓄を傾けて若き床次を誘導するに兄弟も啻ならぬものがあつた。されば政本袂を分たんとして、高橋總裁の下を永久に離れ去るべく餘儀

なくされた時には、彼れは長大息して高橋翁に將來を見るの明と、時局を乘り切るの斷のないことを歎じた。惟へらく

『自分達が脫黨すれば一人で行くやうなヘマはやらぬ。縣全部の代議士に、縣會議員、次の候補者まで景物として、ソックリ浚つて行く』と彼れに於ては易々たる藝當である。その後秋田の政黨色が如何に移り變つて行つたかに就いてはこゝに詳述する必要はない。

たゞ今まで犬猿の間柄だつた憲政會の元老町田忠治と、これからは手を握つて進むことになつたことは、選擧民に一種奇異の感を與へてゐないではないが、小異を捨てゝ大同につく、時勢なればまた已むを得ないのであつて、彼れの明敏な頭腦を以てしては、此間何の不思議もあるまい

彼れ本黨に在りしその頃には、總裁床次の前に出でゝ若年の子或は弟に誨ゆるが如く、何事にあれ直諫し得た一人だ。嘗て『床次さんあなたはまだお若い。今から總裁になるやうな心を起しては駄目です。』と云つたこともあるのだが、事實榊田の心中、床次を是非一度は總理大臣の位につけたいのだ。その海山の思ひを包んで、新民政黨總裁濱口に盡す彼れの心を、憐れと思はぬものとてはないのである。しかも政界の汚濁汲むに堪へざる中にあつて、その彼の如き義理と人情とを有する人物を發見することは、せめてもの清涼劑たることを感謝しなくてはならぬ。

寡言實行

寺島權藏氏

雪の富山は、今回の普選戰に於て民政黨が絶對優勢を占めた土地柄、他縣に比し万丈の氣を吐くに足る事は勿論であるが、彼が如きは、天晴れ大衆の支持を得て、美事普選議會の光榮ある議席を贏ち得た一人である。

早大政治科を出で、永らく新聞記者をやつてその敏腕を謳われて居たが、當時の横山章氏にその人物を認められその懐刀として氏の秘書役をつとめ縱横の活躍を見せた事もある。天性の世話好さで、犧牲の精神に燃えて居る、時々人の面倒を見過ぎて窮地に陷る事もあるが彼は笑つてこれが解決を忘れぬ。人に對するに實に到れり盡せりで鄕黨。これが爲めに彼を徳とせぬ者とてはない、富山民政黨支部の總務の要位に在つてまた三日市町長をも勤めても居る。彼は必ずしも辯論の雄ではないが然し口を開けば大衆の共鳴を得て、大向の喝彩を博しても居る、最高幹部の信任を得て黨本部の常任幹事を永らくつとめて幹事長を補佐して居たゞけになか〳〵よく政界の表裏に通じ政機動くの時、彼の明暗活躍は凄じいものがあつた。新時代に理解を有して居るだけに彼は早くから普選を高唱して讓らずよくその第一線に起つて大衆の選擧權獲得に努めた功績は決して尠しとせぬ。今や當選二回、彼の眞骨頂をソロ發揮する時でもある。しかも前途春秋に富み奇智縱横、民衆の味方としての彼の今後は刮目に價するのである。

小氣味よき切れ味

岩切重雄氏

一高から帝大を出て、地方官をちよいとしたところで鹿兒島市の助役に納まり込み、代議士に出てもうこれで二度目だから三十九歳の男としては馬鹿に速足である。一高時代から練へあげた雄辯と、實際を經て來た計數的の頭とで、彼れは議會の壇上に、最早やなくてはならぬ闘士となつたのである。黨少壯派中財政通を以て名あり將來を嘱目されて居るほど彼は民政黨の花形である。

嘗て彼が松方老公の許に使した時に、老公からその娘を貰へとせがまれたり、高橋達麿藏相の秘書官となつたことなどに徵するも、彼れの凡才ならざることを證するに餘りがあるが、老床次また彼を寵すること子の如く、濱口の許に薦めてその登用を說くことあるのも、單に同縣人の誼みとのみは云へないのである。彼はまさしく鐵中の錚々たるものに相違ないのだ。

政黨政治に動功拔群

降旗元太郎氏

嘗て隈板内閣が成立した時に、往年の大隈侯から福島縣知事になれと勸められて『拙者不肖ながら政黨人として政界に盡したい覺悟がある。官僚の端くれなぞ御免蒙る』と、きつぱり云つてのけた彼れ降旗元太郎は、大西鄕の抱懷したやうな氣魄の持主ではないだらうか。

『名譽もいらず金もいらず、地位もいらないと云ふ男はしようのない奴だ。然もこのしようのない奴が居なければ國家は亡びるのだと西鄕南洲は曰ふた。

世間は滔々として營利これ事とし、人を排して自ら顯要の地位につかんことに日もこれ足らず喘いでゐる中に、彼れの淸節を聞くことは、まさしく末世に福音を聽き、旱天に雲霓を望むの思ひがある。

普選の殊勳者、政黨内に於ける親和の楔としての彼れは、地方に於て地盤開拓の恩人であり、親切で謹直で、鄕閭に淳風美俗の慣らひを敷いた先達である。政黨界に彼れを有する信州は、一方彼れに對抗する小川平吉を有することによつて、政爭の却々激烈なところである。一榮一落はそれを地方人も注意するし、本人にとつても氣がかりではある。

特權内閣を倒すことに於て一致した政憲兩派は、加藤高明伯の下に憲政擁護運動を開始した、多年の政敵と手を握る憲政會も定めし心苦しがつた事でもあらうが、政友會も餘り好い氣持ちがしなかつた、然し政派を超越した兩派は、これもその行き掛りを放擲してひたすらに特權内閣の打破に猛進し、遂に功成りて玆に護憲――政憲協調内閣を形勢する事となつた、即ち彼れ降旗は實に、憲、政兩派をして手を握らすべき導火線となつたもので、その間の苦心言外に絶し美事此の大役を勸めあげた彼の功績憲政史上特筆すべき價値があらう。

かくて加藤憲政會總裁を首班とする護憲内閣に於て彼降旗は、陸軍の關和知君の後を繼けて政務次官となり、鐵道から海軍へと、移つて行つたが、小川は法相、横田千之助亡き後の、政友會を代表する司法大臣となつたものだ、然し此の横田法相の後任物色については、當時憲政會としてはより多くの發言權をもつてゐた事は事實である。この時小川を推擧して信州の名をなさしむべく努力したのは實に彼れ隆旗であつたので、その任俠は久しく政界美談として傳へられもしてゐたのだ。

因縁といふものは爭はれないもので、武田信玄の弟、武田左典厩信繁こそ、實は彼れの先祖であつて、甲斐から移つて信州に住むことゝはなつたが、上杉謙信が山國の甲斐へ、鹽を送つて敵國にもなほ便宜を與へたといふ大雅量は、今にして彼れ降旗が心にくきまでに學びとつてゐるのである。

政黨界の重鎭として早稻田の先輩としての彼れはその政治的經歷に於ても申分なし、若槻内閣成るの日は大臣としての一椅子を獲る資格も十二分に具備する、しかも永き彼の政治生活中、財寶を、蕩盡して久しく不遇の生活苦を嘗めて居るが、反つて彼の壯志は少しも衰へず正義にして酬ゐらるゝ時が來るならば、彼の榮達は必然の數であるとして、ます〳〵その健在を祈らぬものとては、一人もないだけ彼は各方面に評判の好い男である。當選十回、目下總務の重位を占めて居る。

民政黨を繞る

貴族院の重なる人々

智慮周密

學識と手腕

江木　翼氏

床次、若槻と肩をならべた聲望を有す、法學博士にして大隈内閣當時の書記翰長、憲政會内閣では親任待遇の書記翰長から、司法大臣、内閣の大世帶を殆ど彼れ獨りで切り廻したものである。高明總理の信頼なか〳〵に厚く、當時書記翰長の方が有力なる大臣以上の權勢を持つて居たゞけ彼の活腕の凄いものがあつた事が窺はれる。久しく官僚生活を經て來て居るのであるが、然し黨人の要諦をよく呑み込むで、近來黨内に於ても評判が頗る好い。

頭腦極めて明晰にして、如何なる重要問題に直面しても快刀亂麻を絶つの概があり、群議旺むにして容易に解決せぬ時に於ても彼の一語、好く鐵鏑鐵的を貫いて居るのである。加ふるに人事に精通し殊に法制上の智識が豐かであるのみならず、内政、外政の諸問題に對する彼の博大なる智識は決して第三者の追隨を許さぬものがある、彼が數年前率先して提唱した普選に於ける比例代表制なども今回の總選擧の結果漸く政界各方面の注意を惹ようになつて來て居るではないか。

貴族院に於ける質問戰は、若槻、江木の兩者をまつて始めて政府の心膽を寒からしめるのであ

る、彼の才藻と周密なる論理を以て總理大臣を彼れの矢面に起たせる時、傍聽席は思はず緊張を加へもするのである。

「江木さんも近頃よくなつたね。矢張り普選時代だね――とその態度の民衆化せる事官僚臭味がとれて來て居る事に大なる驚きを表白して居るのをヨク耳にする事がある。

今回の普選戰に際してはよく帷幄に策をめぐらし選擧長安達を補けて豫期以上の成果を獲せしめたのも彼れの隱れたるの功沒すべからず殊に大藏大臣格として戰線に起つ多くの士をして決して後顧の憂なからしめたその苦心又察するに餘りある。

一寸見ると『冷やかな男』のように見えるが、あれでなか〳〵涙もあれば血もある、彼れに見込まれたら、タトエ、人が如何なる中傷誹謗を試みようとも決して手放さぬところに彼れの面白味がある。

斗酒敢て辭するところにあらずと、大に豪快の氣を吐いた時代もあるが、近來健康の都合で此の方面はやめて居る。そして親任待遇の書記官長就任と同時に令夫人を失ひ、遂に大臣の顏を見る事なしに空しく逝つた令夫人にも同情するが。國務多忙、一夜の看護をだにする事の出來得なかつた事にも當時世間は敬意を表しもした、然しそれ以來彼は無妻を持續し所謂獨身者の天下を未だに飽喫して頗る清淡なる氣分を漲らして居るのである。

今日の聲望を以てすれば、濱口內閣成るの日、再び彼の頭には大臣の榮冠に輝くであらう事が信ぜられて居るのである。

老幹梅薫るに似たる

石塚英藏氏

西久保東京市長に不信任案が投げつけられる日、寒風吹きまく芝公園の廣場に、東京市民の熱情を代表するやうな群衆を前に、市會の無謀、清廉の老市長に及ぶの非を鳴らして、英氣颯爽たる一老紳士があつた。

これぞ往年の東拓總裁、今は貴族院にあつて茶話會を牛耳つてゐるところの石塚英藏であつたのだ。清節氣を養ふて多く語らず、老來今日に到つたけれども、天下の士風、地を掃ふを見ては默して居られぬ。旁々老市長とは昵近の間柄とあつて、市民の聲を代表してこゝに立つたのである。石塚君は元來地方官の出で、知事をよして拓殖局長官をやり、それから東拓總裁として、わが國の人口食糧問題の爲めに氣を吐いてゐたが、今や貴族院に於ける一方の雄、同問題にかけては押しも押されもせぬ第一人者である。床次とは莫逆の友で、本黨解散の當時に於ける親友の惑はざる政治的立場に同情し、新黨樹立と共に自ら進むで黨籍を入れ、民政黨の爲め各所に虹のような氣を吐くその黨人振りには、さすが反對黨の首領義一大將も驚いて居る。

親分肌の熱情家

岡喜七郎氏

宰相原の三羽烏と謳はれて、當年の警視總監であつた彼岡の手腕はまさしく近來の出色であつた。

原氏の歿後は床次竹次郎の意氣に感じて以來、お家昌へよと祈りもし奮鬪もしたが、武運拙なくして政友會を去らねばならぬやうになると、床次と始終を共にして、政本黨の城に立て籠もつたのである。やがてはまた之と行を共にして新生の民政黨に甦り咲き、黨勢擴張に、地方遊説に席の暖まるを知らざる精勵ぶりである。地方官として半生を送つたものの常として見るところは、鼻もちもならぬ官臭であるが、わが、岡に限つてはかゝる陰翳はどこを探してもない。

親分肌で浪人肌で、簡單に話のわかる通人であるから、かれの許に集まる乾兒の數も却々に多く、彼れはよくその面倒を見て、血も涙もある措置をするのである。民政黨のともすれば知に優つて情に缺くる傾向ある個性に對し、かゝる人物を一枚加へたことは、同黨をして愈々重からしむるものであることを萬人等しく信じて居る。

重厚の人格者

太田政弘氏

伯の大命を受けて内閣を組織するや、知事級の古參、しかも總裁の鄕里愛知に播居してゐた太田政弘を拔いて警視總監とし、帝都の警察事務に當らせてからは、官を辭して太田の黨に酬ゆるところは以前にもまさるものがあるやうになつた。純情の太田氏は加藤伯に酬ゆることは、いまに於て民政黨に盡さねばならぬ事理をよく辨へてゐるのだ。

その總監であつた時分には、貴族院係の一部をも勤めて、仔細にその情報を齎して加藤伯の參考に備へることを怠らなかつたが、今日では貴族院議員にして黨の爲めに、地方遊説等に出蒐けるものとしてはイの一番に記されて居る。普通選擧の監視委員として川崎、松村、塚本君等と共に、その功績尠少ならざるものがあつたことは　當時の新聞も喧傳したほどで、太つ腹で實直な彼太田としては、世間に非違の行はれることより不快なことはまたとないのである。

憲政會總裁として優れた人物であつた加藤伯は優れた股肱を澤山に持つて居た。

失政を糾彈し、權勢を笠に、專恣を事とするものをとつちめるのは、彼れの性格より迸る至誠であるかのやうにも思はれる。

義俠の人

度胸の人

川崎卓吉氏

貴族院議員であつて、黨の爲めに捧ぐる、彼れの如き敦厚な人物はあまりに多くはない。

前々總裁加藤伯の寵をうけて、原内閣から知事の榮職を取り上げられたところで名古屋市長になり、護憲内閣成ると共に警保局長に重用せられた彼である。その後累進して内務次官とまでなつた恩義に酬いる爲めか、彼れは營々として民政黨の爲めに力を注ぐ一個の黨人である。嘗ては名古屋の市會が今東京に見るが如き流血市會と化して、反對黨の壯士幾人、市長としての彼の前に辭職を迫つた時にも、所信を貫いて斷々乎として動じなかつた膽斗の如き彼れである。兼ねて人情に勝れ、世情に通じて、血も涙もあると稱せられる盍官僚畑に育つたものにして、彼の如く汚の拔けた者もまた尠いのである。

去る府縣會今回の普選には、選擧監視委員となつて地方を巡回し、敵黨をしてその膽を寒からしめたが、かゝる功績は他日に於て、更に大いに酬いらるゝところあるべきは理の當然であらねばならぬ。

細心で

太つ腹

松村義一氏

前警保局長の松村義一は、江木翼を同郷の先輩とし、官海の手腕優れてゐた爲め、川崎卓吉氏が内務次官たるに及んで大分縣知事から拔擢され、その後を襲ふことになり、幾許もなくして貴族院議員に勅選された幸運兒である。

細心にして太ッ腹、これを要するに圓滿にして角のとれた人格であるが、優れた氣魄の爲めに彼れはその所信を斷行することに於て何人の端睨をも許さぬのである。年少氣鋭である丈けに、新時代といふことに對しても十分な理解を持ち、新聞といふものを知つてゐることも、これに對する態度の穩當なことも、常人の眞似の出來ないことである。

この頭腦と氣魄とを以てすれば、彼れの今日あるは決して偶然でないのだ。今回の普選に於ては、石塚、太田、川崎氏等と共に選擧監視委員としてよく干渉壓迫を牽制して反對黨を畏怖せしめ、東奔西走席暖まるを知らず政友會絶對優勢の山口縣に於ける民政黨の成果は彼の努力にまつものである。万丈の氣を吐くに足る事は功名記の一齣に明かであらう。濱口内閣成る日、書記官長か法制局長の有力候補者中にも數へられて居る。

濱口總裁を繞る重なる人々

定價 金廿五錢

昭和三年四月十日印刷
昭和三年四月十三日發行

不許
尖風
復製

著者 角屋謹一
東京市外世田ヶ谷太子堂四三二

發行者 天沼周次郎
東京芝區櫻田太左衛門町七

印刷者 天沼藤太郎
東京芝區櫻田太左衛門町七

發行所 東京市芝區櫻田太左衛門町七
文王社
電話銀座三八九八番
振替口座東京一三四〇三番

317
431